
クレイジーパープル～たった七日の恋のうた～

野生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイジーパープル〜たった七日の恋のうた〜

【Nコード】

N5002Z

【作者名】

野生

【あらすじ】

全身紫色の服を着こなす変人トレジャーハンター・イルド
彼が今回立ち寄った村は、たった七日しか生きられない人々が生きる不思議な村だった。

プロローグ(1)

たった七日の恋のうた

たった七日しか生きられない命

死なない者たちが生まれ始めたその世界で

彼らは儚く

そして……

美しかった

序章 『うちはダメですよ。ぼく、今日死んじゃうんで』

イルドが前の町を出発して五日。

太陽が水平線に近づき始めた頃、辺境の森の上空を走っていると風に乗って歌が聞こえてきた。微かだが、スカイバイクのエンジン音に混じり確実に聞こえる旋律。澄んだ清流を思わせる瑞々しい男声。その声を聞いただけで、歌い手は色男だと勝手に想像してしまうほどだ。だが、こんな森の中で歌など聞こえるのだろうか？

アクセルを絞り、エンジン音を落としてみる。エンジン飛行から推進飛行に切り替えると、頬に当たる風のタッチが柔らかくなった。

と同時に、聞こえていた声を見失ってしまった。いくら耳を澄ませても、身を隠した声は見つからない。

「空耳か？」

零す声に残念な色が滲む。前の国を出発してからすでに七日。一人旅に慣れているとはいえ、出逢うのが木や石ころばかりじゃどうしたって寂しい。魔獣でもいいから話し相手が欲しいとこの前たまますれ違った承認に話したら、涙を流して同意されたのをイルドは思い出した。

「ん、よし。ここはコイツの出番か」

片手で器用にハンドルを操りながら、イルドは念のためにと、右耳に付けていた薄紫水晶のピアスを撫ぜた。指先でなぞった水晶が淡く輝き、イルドの聴覚が鋭くなる。耳を切っていた風の音はより深く聞こえ、下方の木々のざわめきの音は、その葉音がどの木から洩れたものかも鮮明に聞き取れた。

「ん、調子良好！」

あたかも高周波で音の波を捉える集音機さながらに、持ち主の超感覚を高める天然の石【蝶聴石^{ちょうちようせき}】。「さすが俺いい物を手に入れた」と、イルドは自分自身を称賛する。

前の町でハントしたお宝に得意げな笑みを漏らしたイルドは、耳を澄ませ森の音を注意深く聞いた。揺れる木々のざわめき、動物が踏む落ち葉の音、鳥のさえずり、風の声。

そんな静かな音に混じり、とても落ち着いていて、そして情熱的な歌が届いた。これは、恋の歌だろうか？

空耳じゃなかったな！

自分が最初に捉えらものが幻聴じゃないと知り、イルドの胸は高鳴った。イルドは自身はあまり自覚していない節があるが、わりと人恋しい分類に入る人間だ。本当なら、一人で旅をしているのがおかしい。

「しっかし、変だな」

妙なる調べに耳を傾けながら、ふむつとイルドが唸る。頭の中にある地図には、この辺りに村や町は無かったはず。

けれど、耳に届くその歌は、確実に誰かがいることを告げていた。これだけ綺麗な歌声だ、きっと人の姿はしているだろうと、イルドは勝手に決めつける。というよりは、人じゃないと許さないとまで言いたげな表情だ。以前、楽しい音楽に誘われて訪れた村が食人の村であったことなど、イルドは完全に忘れていた。

「行ってみるか」

言葉を漏らすよりも早く、すでにスカイバイクのハンドルは歌の聞こえる方へと向けられている。地平線から伸びる太陽の光。出来

れば明るいうちに人里に着きたい。そんなもって、温かい料理とお風呂、ベッドが与えられたらならばもう何もいらない。

上機嫌になってきたイルドのヘタな鼻歌が、綺麗な空と歌に混じり、なんともおかしい旋律を奏で出す。急ごう。そう思いアクセルスロットを捻ると、ヘタな鼻歌なんて止めるとばかりにエンジン音が木霊した。

推進飛行から再びエンジン飛行となり、スカイバイクの両腹から伸びる細長い円盤状の飛翔翼が風を切る。スカイバイクは緑の絨毯の上を滑り、歌声に誘われながら空を駆けた。

イルドの胸が、まるで極上の料理を前にしたかのように高鳴る。しかし、次の瞬間、突如としてその晴れた表情に陰りが指した。

「アイツは、来てねえよな」

アイツ。この世でイルドが最も捕まえた男。イルドが複雑な表情を浮かべる。「居ろっ」という願いと、「居るな」という願い。晴天に振る雨のような複雑な表情を浮かべていたイルドは、そんな思いを断ち切るかのようにスロットルを全開に捻った。

太陽が緑の地平線に差し掛かった頃。背に背高い丘を構える、小さな村が見えてきた。村の奥には何やららせん状の大きな建物がある。やはり、地図にない村だった。

「さーてと。あれが、入口だな」

村の入り口を見つけ、大きく旋回。たとえどんな街だろうと、入る時は村の正面から堂々と、というのがイルドの流儀だ。理由は簡単。その方がカッコいいから。

イルドを誘った歌声は、これでもかというくらいに村から洩れていた。まるで、村全体が歌っているようだ。楽しそうでよしっ！

村を囲む木々に注意しながら徐々に高度を下ろすと、視界が緑に覆われる。スカイバイクを乗りこなす上で一番難しいのが離陸と着陸だ。イルドはもう何年と乗っているが、着陸の際に小石などに躓き転倒することは今でも珍しくない。

イルドは集中すると、「ここだ」というタイミングを見極めた。

前輪と後輪を同時に下ろすと、車体が自重を受けグンと沈む。今日の着陸は無事成功。ハンドルバーの先端にあるスイッチを押し、バイク腹から伸びていた飛翔翼を収納する。

着地成功で一安心という具合に、イルドは軽く息を吐いた。舗装されてない道はドドドドッと車体が跳ね走り難いが、村の入り口はもうすぐだ。

村の入り口には申し訳程度の小屋があった。見張り小屋、小さな村には必需品だ。エンジン音を聞きつけ、守衛と思しき青年が小屋から出てくる。その青年を見て、イルドは思わず「ぴゅー」と口笛を吹いた。

見張り小屋から出てきた青年は、守衛というにはかなり若く、そして守衛にしておくにはもったいないほどの美青年だった。精悍な顔立ちで、年は十八歳前後。王国の騎士団に入っただけならば、さぞかし歓声を集めるだろう。

先んじて「こんにちば。いや、もうこんばんはか？」と会釈するイルドに、青年は返事を返すのも忘れ、まるで珍獣にでも出会ったかのような表情を見せた。

そんな青年の態度にイルドは小さく笑って控えめ肩を竦める。慣れ親しんだリアクションだ。けれど何度見ても飽きない。

（これこれ、この反応だよな）

表向きは平静を装いながら、心の中ではイルドは満面の笑みを浮かべていた。新しい村を訪れる上で、イルドの一番の楽しみになりつつあるのが、この第一村人発見の時間だった。

イルドの格好はかなり異様だ。何が異様かといえば、その色彩感覚の一言に尽きる。紫。イルドは身に纏っているモノを紫に統一していた。黒みがかった紫のオーバージャケットに、赤紫のパンツ。薄い紫のシャツに、灰紫のシューズ。果てには腰に掛けたガンベルトや、拳銃にいたるまで全て紫で統一されている。もちろん、彼が乗ってきたスカイバイクも紫だ。

漆黒の髪と真紅の瞳を除けば、まさにその姿は紫のお化けである。

なにか、悩み事でもあるのだろうか？　そう、見るものに思わせる恰好を、イルドは満面の笑みで着こなしていた。

半ば呆然として自分を見つめる青年に、イルドは「そんなに見られると恥ずかしいな」と冗談交じりに苦笑する。

「す、すまない。その……なんとも個性的な格好だな」

精悍な顔つきに似合った凛々しい笑みは若干困惑していた。「変な格好」と言わず「個性的な格好」と評したのは彼の優しさだろう。イルドは「ああ、よく言われるよ」と頷くと、自信たっぷりな笑って答えた。

「でもな、コレ。今、王国じゃあ最先端のファッションなんだぜ」「そ、そうなのか？」

イルドの言葉を聞き、青年は自分の服装とイルドの服装を見比べる。

そんな彼に、イルドはにいつと底意地の悪そうで、そして無邪気に微笑みながら言った。

「わりい、嘘だ」

「なっ！」

騙されたことに羞恥から青年が顔を赤くする。

「悪い癖なんだ。許してくれ」

すまなそうに頭を掻きながらすぐに謝るイルドに、青年はますます珍妙な生き物を見るようにイルドを観察する。おそらく、彼が今まで、そして今後出逢う生き物の中でイルド以上に奇妙な生き物もないだろう。

そんな自分の反応に気が付いた青年は、コホンと咳払いをすると怒ったような表情を浮かべて真面目に言った。

「嘘つきは感心しないな」

「じゃあ、ジョークってことにしてくれないか」

はにかみながらおどけるイルドに、青年が思わず笑みを零す。残念ながら、青年は完全にイルドに飲み込まれていた。お気の毒しか言いようがない。

イルドの独特の空気に和まされた青年は、自分を落ち着かせるようにもう一度軽く咳払いをすると、友好的な笑みを浮かべて深く一礼した。

「ようこそ、旅の人。我が『セケイダ』村へ。歓迎するよ」

「おいおい、いいのかよ。こんな怪しいやつを歓迎しても」

「……自覚はあるんだね」

深く頷いた青年の口から思わず本音が漏れる。

「失敬」

「いや、アンタがまともだってことが証明されただけだよ。もっと喜んだ方がいいぞ」

まったく気にした様子の無いイルドに、青年はほつと息を着く。イルドに害意は無い。そう感じ取った彼は朗らかな笑みを浮かべると、胸ポケットから小さな小石を取り出し、イルドに差し出した。

「なんだそりゃ？」

見たことのない鉱石に、イルドが石を覗き込む。すると親指ほどの小さな石は、イルドを映した途端に淡い水色の光を放出し始めた。

「おおお」

子供のような声を漏らすイルドに、青年はくすりと笑いながら石について説明する。

「守針石と言われるものでね。害意が無いなら青系の光を、害意のあるものには赤系の光を、害意の大きさに比例して放つんだ。便利なものだよ」

「紫は無いのか？」

「君が身に付けていたらいつか紫に光り出しそうで怖いな」

騎士のような佇まいをみせながらもどこかユーモアな表情を見せたその青年は、スツと道を開け、イルドを村へと導いた。

「入りました。君に、ゆりかごの導きがあらんことを」

「サンキューな」

青年に礼を言ったイルドだったが、さて村へ入ろうとする足をふと止めた。

「あ、そうだ」

思い出したようにオーバージャケットの内側から、一枚の写真を取り出した。写真には清楚なローブを纏った女性と、漆黒のマントを羽織った男性、そしてこの時は感性がまともだったのか、色がまともな警備服を着ているイルドが写っていた。

「コイツがここに来たりしてないか？」

その中の一人、黒のマントの男性を指しながらイルドが訊ねる。

青年は写真を受け取って確認すると、すまなそうに首を横に振った。
「残念だが、見てないな」

「そうか、わかった」

写真を大事に内ポケットに戻したイルドは、なぜか安心したように頷き、もう一度青年に礼を行って振り返った。

(2)

村の門を抜けるイルド。しかし、イルドの足はすぐに止まる。何と表現したらいいだろうか。

一步、町へと足を踏み入れたイルドは、その景觀に思わず「へー」と感嘆の溜息を漏らさずにはいらなかった。

こりゃ、壮観だな。

森の中とは思えないほど綺麗になられた道。それぞれの家の外柵を彩る花々。村の中央から湧き出る噴水は、その色は限りなく赤に近い紫。葡萄酒が仄かなアルコール臭を発しながら、それでもあくまで控えめに流れていた。

耳をくすぐるとめどない歌声。その町では、村人全員が歌っていた。しかも、そのすべてが衛兵の青年に負けず劣らずな美青年、または某国の姫に比肩するような美貌の乙女たちだ。美男美女の美声が、それぞれの恋の歌を奏でる。

半ば呆然としながらその歌声に聞き入り、村の入り口で立ち竦むイルド。

「あんた、もしかして旅の人かい？」

村の入り口にあったベンチに腰掛け歌っていた青年が、イルドに近寄り声をかけてきた。軽く焼けたその青年は、やはりというか色男だ。

「ああ、まあな」

「そうか。メルクが通したってことは安全なんだろうな。ちょっと見た目はアレだけだよ」

「メルクってヤツには大絶賛だったんだけどな」

「え、マジ？」

「嘘だよ。遠まわしに撃沈されたさ」

肩を竦めるイルドに、青年は「あはははは」と爽やかに笑う。どこか、海に居る漁師のようだとイルドは思った。

「こんな辺境の町にはるばるようこそ。まあ、ゆっくりしていくといいさ」

「それはありがたいな」

「俺はマルイ。アンタは？」

「俺はイルドだ。トレジャーハンターをやっている。この村に宿はあるか？」

「んー、残念ながら宿は無いな。そもそも、この村にはあまり旅人が来ないし」

「そうか。じゃあ、どうするかな？」

今夜の寝どこのアテを考えてと、いつの間にかイルドの周りに人垣ができていた。「旅人」「旅人だってさ」と、物珍しそうにイルドを見つめる村人たち。こんな森の辺境にある村だ、マルイの言うようによそ者は珍しいのだろう。

とはいえ、だいたいどんな村だろうと、イルドの奇妙な姿は注目を集めてしまうのだが。

イルドは自分に向けられた好奇の視線をどこか気持ちよさげに受け止めていると、マルイがまるで往年の友人のように、村人たちにイルドのことを紹介した。

「彼はイルド。旅のトレジャーハンターだ。今夜泊まる宿を探してるんだが、誰か泊めてやれるやつはいるか？」

マルイの申し出に、村人たちが顔を見合わせる。それはそうだろう。このご時世、見ず知らずの他人を泊めるなどなかなか出来ることでもない。イルドも旅の中で、そういう経験は何度もしてきた。

だが、彼らがイルドを泊めることを迷ったのは、もっと別の理由だった。

「ミック。おまえんちは無理か？」

「ぼくのうちですか？」

マルイが声を掛けたのは、どこか子供っぽさが残る青年だった。どちらかといえば可愛いと言える容姿のミックは、マルイの言葉に腕を首の後ろに回しながら、何気なく答える。

「うちはダメですよ。ぼく、今日死んじゃうんで」

「……え？」

そのミツクの答えに、イルドは呆けたように目を丸くし、「悪い、なんか聞き間違えたみたいだ。今、なんて言った？」と聞き返した。イルドの問いかけに、ミツクはやはり何気ない口調で、同じ言葉を口にした。

「うちはダメなんですよね。ぼく、今日死んじゃうんで。すみませんね、せつかく来てくれたのに」

まるでそれが当たり前のように答えるミツク。

イルドはさすがに冗談かと思ったが、ミツクの返答を聞いたマルイは「ああ、そうか。わるいわるい」と、まるで驚いた様子もなく頭を掻いていた。どうやら、冗談の類じゃないようだ。

なにかが違う。この村に横たわる暗黙のルールのようなものが、ようやくイルドにも感じ取れた。あまり嫌な感じではない。むしろ、それはどこか温かい。

イルドが訝しんでいる中、村人たちは彼を誰の家に泊めるかという相談を始めた。

「サーニスの家はどうか？」

「ん、アタシも明日死ぬし。彼も明後日には死んじゃうからちょっと。クレマのところは」

「私はまだ六日あるが……。今はパートナー探しに専念させていたきたいのだ。すまない。ソリツシュはどうだ」

「ん、うちはかみさんがなんて言うかだな。ほら、アイツこの村じゃ珍しくかなりの人見知りだろ。俺の方が先に逝くから、その後が心配だしな」

平然と繰り返される「死」という単語。イルドは今までいろいろな村や町、国を回ってきた。その中には、貧困や戦争で「死」が日常だったところも少なくは無い。

しかし、この村の村人たちの話し中に出てくる「死」という言葉は、そんな凄惨さはなく、あくまでも日常的な会話として受け入れ

られていた。

さて、どういうことだ？

イルドが村人たちの言葉の真意を探っていると、不意に一人の女性が「うちにくれば？」と名乗りを上げた。

「シェイナ、いいのか」

マルイが問いかけると、シェイナという女性は太陽に向かって活き活きと咲く大輪の花のような笑みを浮かべながら、腰に手を当て、胸を張って答えた。

「うん。アタシはもうパートナーも決ってるし、時間もまだあるからね」

「リクルに了解は取らなくてもいいの？」

「あはははは、大丈夫、大丈夫。リクルは私の言ったことには逆らわないから」

笑いながら手の平を振って答えるシェイナに、村人たちが苦笑を漏らす。話しの流れからすると、リクルがシェイナの夫なのだろう。まだ会ってはいないが、なんとなくイルドはそのリクルが苦勞している姿が浮かんでしまった。

「イルド、ちなみに何日くらい村にいるつもりなの？」

シェイナの質問に、イルドはひとまず自分の感じた疑問を頭の隅に追いやり、顎に手を当てながら考えた。

「三日〜四日つてところかな。まあ、早ければ明日には出るかも知れねえけど」

「そつ。じゅあ、ちょうどくらいかな。んじゃ、イルドはうちに泊まるで決定、てことで。みんな、いい？」

シェイナの質問に、村人たちが同意と共に温かな拍手を送る。すると、誰かが申し合わせたわけでもなく、彼らは歌い始めた。

「歓迎しよう旅人よ」

紫を身に纏い 紫の馬に乗った旅人よ
君に出会えたことを喜ぼう

この空と共に この大地と共に
この短い命のなかで

君に出会えたことに感謝しよう

どうか笑ってほしい

どうか喜んでほしい

君にも私たちと同じように感じてほしい

再び旅立つその日まで

君は我々の友であり、恋人であり、家族なのだから」

身を包む旋律。彼らの声が音波となつて、イルドの身体を通り抜ける。音は声となり、声は想いとなり、イルドの身体を包みこんだ。もう覚えてはいないが、母に抱かれている赤子はこういう気持なのかもしれない。打算などない、それこそ無垢で純粋な愛情。普通ならば成長するにつれ薄まっていくなはずの純粋さが、彼らの歌には溢れていた。

温かな歌声の終わりと共に、イルドは真摯なまなざしで彼らへ深々と頭を下げる。

「手厚い歓迎、心から感謝するよ。いい歌、聴かせてもらった。王国の聖歌隊にも負けねえよ、あんた達の歌は」

「また、嘘じゃないだろうな」

「冗談交じりに問いかけるマルイに、イルドは「まいったな」と頭を掻きながら、ひょうきんな笑みを浮かべ肩を竦めて答えた。

「ああ、嘘だ」

「なっ？」

「ていうのは、嘘だ。本当に、いい歌だったよ」

「いい……。この、嘘つきめ」

まるで親友の悪戯を咎めるように笑って肩に腕を回すマルイに、イルドが「ああ、よく言われるよ」と頷く。首を絞めてくるあたり、ちよつと本気で怒りに来ているところが、また彼の人柄の良さを現していた。ちよつと苦しいが我慢。と思つたが、若干強く仕舞つて

きたので、いい加減にしろとばかりにマルイの腹へささやかな拳を打ち込んだ。

その様子を見て、村人たちがさらに大きな笑い声を上げる。まるで、本当に往年の友を出迎えているようだった。

「はいはい。歓迎の挨拶が済んだところで、そろそろ行こうか」

手をパンパンと叩くシェイナの言葉で、イルドのささやかな歓迎会は終了。マルイ達にもう一度礼を言ったイルドは、エアバイクを押しシェイナと共に彼女の家へ歩き出す。

隣を歩きながら、イルドはそつとシェイナの横顔に眼を向けた。

他の村人に漏れず、シェイナもかなりの美系だった。気の強そうなアーモンド形の双眸に、スタイリッシュに切られたショートヘア。体つきはスレンダーで、余分な肉は無いが女性特有のやわらかみがる。以前立ちよった王国に居た、活発なダンスで客を魅了していた歌姫をイルドは思い出した。

「ん、どうかした？」

「あ、いや」

イルドの視線に気が付いたシェイナが、その瞳をイルドの視線に合わせる。

自分のことを見つめていたイルドにシェイナは、唇に指先を当て、意地悪気な笑みを浮かべながら訊ねた。

「なーに。もしかして、私に惚れたの」

からかうように笑うシェイナに、イルドは浅く瞼を閉じると、真剣な目をしながら口元に笑みを浮かべて答えた。

「ああ、この感情は……そうなのかな」

「え、え？ ええええええっ？」

ネコのように飛び退きながら、シェイナが自分の身体を抱く。面白いほど動揺を浮かべた顔はリングゴのように真っ赤に染まった。イルドは構わず、紳士的な微笑みを浮かべながら言葉を続けた。

「悪い、これも嘘だ」

「……ふえ？」

「だから。う・そ、だ。人さまの女に手を付ける真似はしねえよ。なんだ、本気にしたのか？」

紳士的な笑みが悪戯好きな悪魔のような笑みに塗り潰される。からかい甲斐のある人間は、イルドの好物だ。シェイナから溢れる素直な雰囲気は、イルドからすれば「からかってください」と犬が尻尾を振っているようにさえ感じる。

「な、な、な~~~~っ！」

ようやく自分がからかわれたことを把握したシェイナは、リンゴのような顔をさらに真っ赤にした。ただし、今度は怒り。よく見れば、目元には涙が浮かんでいる。そうとう悔しかったらしい。

ガツンと、小気味の良い音がした。グーパンチ、しかも狙いはイルドの左目。なかなか、えぐい入り方をしている。

「痛い」

「アンタが悪いわよ」

誰が聞いても、シェイナの方が正論だった。「たくっ」と、怒りを呆れと共に吐き出しながら手を引く。イルドの左目には、綺麗な青あざが出来ていた。

「乙女の純情を弄ぶなんて信じられないわね」

「あゝ、確かにそれはあんまり感心しないな」

「アンタのこと言ってるのよ」

呆れたように零したシェイナは、「もういいわ」と言って早々と気持ちを切り替えていた。

「さあ、行くわよ」

「よかった。見捨てられるかと思った」

「そう思うなら、嘘なんかつくな」

ビシッと指差すシェイナに、イルドが片目を押さえながら「ほーい」と軽く返事をする。明らかに反省していない返事に、シェイナは「はあゝ」っと溜息を付きながら、再び家に向けて歩き出した。

「でも、よく泊めてくれる気になったな。俺みたいな余所もんを」

「早速後悔してるけどね。でも、なんかほっとけないのよ。アンタ、

アタシの連れにどこか似てるし」

「似てるって、そいつも嘘つきなのか」

「ぜっんぜん。むしろ、もんのすごく真面目で素直よ。アタシの自慢の夫だもの」

「じゃあ、どこが似てるんだ？」

「ん、どこなんだろ？」

自分でもはつきりしないらしく、曲げた指を唇に付けながらシェイナが思案する。答えはなかなか出ない。

黙ってしまったシェイナから、イルドは村に目を向けた。村には木造りの家が、距離を保ちながら幾つも立っている。ただ、不思議なのは、そのどれもが同じ作りをしていたことだ。造り手が同じなのもかもしれないが、それにしても家々に変化が少ない。まるで、短い期間だけを過ごすペンションのような趣があった。

不思議に思ったことはもう一つある、村には店がまったくなかった。雑貨屋もなければ、食料を扱う店もない。自給自足をしている小さな村には、珍しいことではなかったが、イルドが観察する限り、家の中には畑を持たないものも多々ある。

なんか、面白いことが起きそうだな。

今まで訪れたどの村とも違うセケイダ村にイルドが期待で胸を躍らせていると、シェイナが「あれがアタシンち」と言って一軒の家を指した。

「へー、いい家だな」

「でしょお」

和んだ笑顔を見せるイルドに、シェイナは得意げに微笑む。

シェイナが指した家は他の家と同じ簡素な作りだったが、家の周りは色とりどりの花で埋め尽くされていた。他の家も外枠は花が植えられていたが、シェイナの家は庭一面を花が覆い尽くし、歩道から家までは芝生の道になっている。いや、よく見れば芝生の道は枝分かれになって庭の四方に伸びていた。ガーデニングの作業に加え、軽く散歩するのにちょうどよい。

見たことのない花にイルドが目を奪われていると、花畑の一角で土をいじっている空色のオーバーオールを着た青年が見えた。

「ただいまー。リクルー」

シェイナが自分の夫、リクルの名を大きな声で呼ぶ。リクルは腰を持ち上げ、「やあ、お帰り。シェイナ」と爽やかな笑みを浮かべながら、泥だらけのショベルを片手に芝生の道を歩いてきた。

リクルは純朴な顔つきの青年だった。他の村人のように強い光ではないが、温かで包み込むような雰囲気は、別の意味で色男。気の強い、それこそシェイナのような女性に人気がありそう。紫縁の眼鏡と飾りっ気のないオーバーオールの作業着は、彼の柔和さに拍車を駆けていた。

ニコニコと、人通りのよい笑みを浮かべながら近寄ってくるリクルを見ながら、「あ、そうか」と不意にシェイナが手を打つ。

「どうした？」

「わかったのよ、イルドとリクルの似てるとこ。二人とも、紫色が好きなんだ」

紫縁の眼鏡を指差しながら答えるシェイナに、イルドの口から思わず「はあ？」という声が漏れた。

「まさか、本当にそんな理由で俺を泊めることを決めたのか？」

「そうよ」

何か問題でも？ と真っ直ぐな瞳で問いかけるシェイナ。どうやら本気らしい。

「世の中変わりもんがいるもんだな」

「自分のことを棚に上げてよく言うわね。心配しなくてもイルドはその中でも上位よ」

にこやかに毒舌を披露するシェイナに、イルドが苦笑いしながら肩を竦める。

すると、二人のところに歩み寄ってきたリクルがイルドの恰好を見て、「うわー」と感心したような声を上げた。

「変態がいる」

にこやかに、爽やかに、悪びれる様子もない直球ど真ん中な暴言。服装に関しては言われ慣れているイルドだったが、さすがにこれほど躊躇なくハッキリと言われたのは初めてだ。いっそ、腹の中で悪口を言われるよりも清々しい。

怒りというよりは驚きに、イルドが言葉を詰まらせる。その隣では、シェイナが必死に口を押さえて笑いを堪えていた。

「シェイナ。この変態さんは？」

「ぷ、ぷぷ。この……ぷぷぷ、変態はつぶははははは」

「笑つか説明するかどつちかにしろ。あと、変態で話しを進めるな」

「あは、あはははは。げほげっほ……ぷははははは」

お腹を抱えて笑う方を選んだシェイナに、イルドが頬をヒクつかせる。どうやらツボに入ったらしく、もはや説明できる状態じゃない。

しょうがないと頭を掻いたリクルは、自分でリクルに自己紹介をすることにした。

「俺はイルド。トレジャーハンターをやっている」

「僕はリクル。皆からは腹黒とか言われてるけど、あんまり気にしないで。本音がすぐに漏れちゃうだけで、本当は気さくな良い奴だから」

「……自分のことを良い奴って言う奴は、俺の経験上大抵悪い奴なんだけどな」

「じゃあ、今回は貴重な経験ができるね。僕は本当に良い奴だよ」
イルドの皮肉に、リクルは笑みを崩さないまましれっと答える。

そんなリクルに、イルドは負けじと笑みを浮かべながら手を差し出した。

「なんだか、お前とは無二の親友になれそうな気がするよ。……嘘だけ」

「そうかい？　僕はイルドとは本当に親友になれそうな気がするな。シェイナが連れて来たってことは、うちに泊まっていくのかな」

「そうしてくれると、ありがたいんだが」

「いやいや、喜んで。歓迎するよ」

「ところで、アンタが紫好きっていうのは本当か？」

「人並みに、ね」

互いに心のうちを読ませない笑みを浮かべながら、握手を交わすイルドとリクル。

嘘つきと腹黒が出逢いは、終始にこやかな笑みに包まれていた。ただ、それは見た目だけ。笑顔のまま毒を吐く二人の姿は、傍から見れば爆弾をふたつ並べて置いてあるような緊張感が漂い、割って入る隙が無い。というか、正直恐い。

ふたりが醸し出す雰囲気、リクルとシェイナを訊ねてきた隣人は、なかなか庭の中に入れないでいた。

「えーっと、もう大丈夫か？」

勇気を出して掛けられた声に、笑顔で牽制し合っていたイルドとリクル、そしてようやく笑いの発作が治まったシェイナが庭の入口に目を向ける。そこには、剣呑な雰囲気収まったことにホッと胸を撫で下ろすカップルがいた。

鍛えられた筋肉が袖から覗く男性と、手にバスケットを持った小柄な女性。これまた二人とも美男美女で、身長差が特徴的ななんともお似合いなカップルだ。

「グライにミーリ。どうしたの？」

顔なじみのお隣さんに、シェイナが嬉しそうな笑みを浮かべながら駆け寄る。その後、イルドとリクルが続くと、グライが自分の目を擦りながら「この人は？」とシェイナに訊ねた。

「この変態は……」

「だから、変態は止める」

「あは、失礼。えっと、彼はイルド。旅のトレジャーハンターよ。今日からうちに泊まるの。イルド、この人たちはお隣さんで、グライとミーリ」

シェイナの仲介を挿んで、三人が「どうも」と頭を下げる。
「旅のトレジャーハンターか、面白い話しが聞けそうだな」

「頼まれれば、いくらでも聞かせてやるよ。面白いかどうかは保証できないけどな」

「そりゃ、嬉しいが。……あいにくと、時間が無い」

微妙な間を空けたグライが、シェイナとリクルに視線を流す。それだけで彼の意思を掴んだのか、二人は柔らかな笑みを浮かべると小さく頷いた。

「そうか、今日なのか」

「ああ、もう時間が無い。だから最期の挨拶に、な」

「シェイナ。これ、私が焼いたアップルパイ。美味しいって言うてくれたから、また作ったの」

「うわー、ありがとうミリー。残さず食べるからね」

自分の入り込めない雰囲気を感じ、イルドは静かに身を引く。何かがある。トレジャーハントで培ってきた勘が、イルドにそう告げていた。

「いいお嫁さんに出会えてよかったね。グライ」

「ああ、そうだな。俺たちは生まれるのも一緒だった。そのおかげで、こうして一緒に逝ける」

「元気な子が生まれると良いね。グライとミリー、二人の子にゆりかごの加護があらんことを」

「ありがとう、シェイナ」

笑顔で言葉を交わす四人。

先に歌を奏でたのは、グライとミリーだった。互いの手を取り合い、声を一つに二人が歌う。

「生まれた時も笑う時も

食べる時も寝る時も

あなたに逢えたから 幸せだった

幾多の偶然の中で出逢えた友よ

私たちを見守り 私たちを支えた愛すべき隣人よ

私たちは歌う 君たちへ

最期となるそのときも 私たちは君たちの幸せを歌おう
どうか、君たちがわれわれよりも幸せであるように
共に、ゆりかごの御前で眠れるように」

男声と女声の深い深い二重奏。その歌詞は即席とは思えないほど、
いや、即席で二度と聞けないであろう歌だからこそ、儂い艶を持つ
てイルドの鼓膜を撫でた。

二人の歌が終わり、旋律が風に攫われる。

歌の余韻が冷め止まぬ中、リクルとシェイナの返歌が始まった。

「去る人よ 我らが友よ

グライとミリー

君たちと過ごした日々は短くとも

君たちと交わした言葉は少なくとも

君たちはたくさんの宝物を残してくれた」

感謝を声に込め、その気持ちを言葉に変え、リクルとシェイナが
歌詞を紡ぐ。

グライとミリーの变化は、その歌に合わせて始めった。

なっ！

心の中で驚きの声を上げるイルド。その眼には、徐々に身体が塵
となっていく、グライとミリーの姿が写っていた。

まずは手を繋いでいない方の手が塵となり、風に流されて消えて
いく。腕が肘までになると、今度は足に塵化の侵食が始まった。塵
化する手と同じ側の足が塵となっていく、片足を失ったグライとミ
ーリは、互いを支え合うように立って歌を聴き続けている。

ただ、二人の顔は果てしなく穏やかだった。身体が塵芥となる苦
痛など感じられず、まるで温かなベッドで今から眠るような安らぎ
の中に彼らはいた。

声を出すことを忘れてしまったイルドに変わるように、リクルと

シェイナは歌い続ける。

「私たちはもう少し生きよう

私たちも君たちのように輝いていよう

君たちのように

私たちも自分の輝く時を精一杯に過ごそう」

リクルとシェイナは歌い続け、その歌に合わせるようにグライとミーリの身体が崩壊していく。片腕と片足に続き身体の至る所が塵と変わり、徐々にその身体を削っていく。

塵芥となり、大地へ、空へと舞って行くグライとミーリ。

隣人を送る歌。一節一節に、イルドとシェイナは思い出を乗せた。

「その優しき魂は天に昇り 我らを見守るだろう

その健やかな身体は大地に帰り 子を育むだろう

私たちは君たちを忘れない

永久の友よ」

ついに微笑みを浮かべた顔と、堅く結んだ手となったグライとミ
ーリ。

そんな彼らへ、イルドとシェイナは今までで最も力強く、そして
優しく言葉を、歌を送った。

「今はただ ゆりかごの下に眠れ」

歌の最後の詩と共に、グライとミーリの身体は全て塵となり。
彼らは死んだ。

それが、イルドがこの村を訪れて最初に触れた死だった。

第一章 『な、嘘みたいな身体だろ』（1）

第一章 『な、嘘みたいな身体だろ』

リクルがオーブンを開くと、立ち上る湯気と共に香ばしい香りがイルドの鼻をくすぐった。

「それで、この村はいつたい何なんだ？」

「何なんだ、って聞かれてもね。はい、次はこれ頼んだよ」

手渡された七面鳥の丸焼きをテーブルに並べながら訊ねるイルドに、後ろで山盛りのサラダを冷蔵庫から取り出したリクルは、器用に眼鏡を押し上げながら口を開いた。

「克蘭シル大陸の南、グレーゲン樹海の奥。人里離れた辺境の村。特産物や名産物は特になし。自慢は美男美女が多いことと、歌がうまいこと。これでいいかい？」

七面鳥の丸焼の隣にサラダを並べたリクルがにこやかに答える。

イルドはリクルに対抗するように笑みを浮かべると、戸棚をあけ、食器を用意しながら言った。

「丁寧なご説明ありがとよ。満足だ。……なんて、言うと思ってるのか？」

「満足してくれないかい？」

笑みを崩さないリクルに、イルドも笑みを崩さず、そして、逃げられないように直球で訪ねた。

「あの二人は、本当に死んだのか？」

「君の目は節穴かい？ 体中が塵になったのを、君も見ただろ。手も足も、胴も首も、頭さえも残ってない人間を生きてるなんて言うなら、君の脳は服装以上に異常ということになるね」

暗に「君の服装は異常だ」と言いながらイルドがオーブンを開ける。すると、先ほど七面鳥の丸焼を取り出して空になっていたオーブンから、こんがりと焼けた川魚が現れた。ついでに言えば、さきほどサラダを取り出した冷蔵庫も、一瞬前に葡萄酒を取り出したと

きは空になっていたはずだ。

コンロの上でぐつぐつと煮えたぎる鍋。火にかけた時はただの水だったそれは、いつのまにかクリーム色に緑や赤の野菜が浮かぶおいしそうなシチューになっている。

「便利なもんだな」

素直な感想を漏らすイルドに、リクルが「まあね」と大した風もなく答える。

喰えねえやつだよ、と口の中だけで呟きながら、イルドはキッチンからダイニングを越えた先にある扉へ視線を投げかけた。木製の扉は、その奥へ消えていったシェイナの姿を頑として隠している。

「で、いいのか？」

「何が？」

笑顔をいったん収めたイルドの質問に、リクルは相変わらず感情の読めない笑みを浮かべながら答える。

イルドは扉から食事の準備を続けるリクルに視線を戻し、自分は先に椅子へ腰を落着かせながら続けた。

「お隣さん、だったんだろ」

「そうだね」

「傍にいてやらなくていいのか？」

非難しているわけではなく、優しく柔らかな声色で訪ねるイルド。リクルはそこで初めて夕食の準備の手を止めると、眼鏡の奥に覗く、見えているのかいないのかわからない糸目をイルドへ向けた。

イルドは足を組み、右腕を背もたれに回しながら静かにリクルの言葉を待つ。

視線を交わし、無言の会話を交わす両者。豪勢な料理を挟みながら、二人は一切それらに目もくれず、互いの目前に座る変人奇人を見つめ続ける。

腹のうちの探り合いで折れたのは、リクルだった。

しょうがない、という風に小さくため息を零し、リクルがイルドの対面の椅子に腰かける。シェイナが消えていった扉を見つめなが

ら、リクルは眼鏡の位置を直すと、まったく別の切り口から話しを始めた。

「イルド。外国じゃ、人はだいたいどのくらい生きるんだい？」

「いきなりな質問だな」

リクルの質問にイルドは苦笑を漏らしながら、視線を夜の帳が落ちた窓の外に向けた。そして、寂しさが増した夜の世界のように、どこか虚無感を漂わせながら答える。

「国による、な。この村みたいに争いのない小さな所なら、だいたい五十歳前後。長生きして七十ちよつと、てとこだる。医者がちゃんといる帝国や大国は寿命は長くなるが、徴兵で若く死ぬ奴も大勢いる。それに、貧困の差が激しい所なら、生まれてから一歳になる確率が五割以下なんてのもざらだ。まあ、たまに不老不死の薬を手に入れたバカな奴らもいるけどな。そんなやつらの末路は大抵……」

「七日」

言葉尻を遮るリクルに、イルドが「ん？」と怪訝な顔をする。

リクルは朗らかな笑みを浮かべながら、大した感慨も込めずに続けた。

「この村の人間の寿命は七日しかないんだ」

リクルの告白に、イルドは喉まで上つていた言葉を飲み込んだ。

「信じられないかい？ 意外に器が小さいんだね」

毒舌を乗せた笑顔をイルドに送りながら、リクルが葡萄酒のボトルを傾け、中の紅い色の液体をグラスに注ぎ混む。濃い、紫にも近い葡萄酒が透明なグラスを満たす。

イルドは鼻から息を吐きながら、ぐつと背もたれに体重を乗せ天井を仰いだ。

「これでもいろんな国や町を回ってきたんだけどな」

「世界の全てを知った気にでもなっていたのかい？ 傲慢な男だね、君は」

「傲慢、か。……そうだな」

口の端に笑みを浮かべながら、天井を仰ぐイルドがリクルの言葉

に同意する。

「イルド？」

微妙に変わったイルドの雰囲気のリクルが視線をガラスから対面に移す。なんというか、イルドの気配が一気に薄れた気がした。口元に浮かんだ笑みは、どこか自嘲的な色を忍ばせている。天井を見つめる目は細められ、どこか違うところを見ていた。

この奇抜な男が？

そう、思わず見るものに思わせるほど、イルドの纏う雰囲気は深い悔恨に満ちていた。

リクルが笑みを解き、イルドの心を覗くかのように細い目をさらに細める。

だが、リクルの目が真実に到達する前に、イルドはふっと微笑みながら状態を起こし、纏っていた雰囲気霧散させた。

「ん、どうしたリクル。愛想笑いは品切れか？」

「……いや、店じまいにはまだ早さ」

意地悪く笑うイルドに、リクルは負けじと微笑みを浮かべながらさらに続けた。

「面白い男だね、君は。興味が湧いてきたよ。言ってることは嘘ばかりだけどね」

「言ってることだけ、だといいな」

再び始まる腹黒と嘘つきの皮肉合戦。

その戦いが本格化する前に、嘘つきは少し和やかな声色で「少し話に戻るけどよ」と切り出した。

「じゃあ、あの二人は寿命の七日が終わって死んだってことか」

「うん」

「じゃあ、なんで塵になったんだ？」

自分の疑問を素直に口にするイルドに、リクルは「子供みたいな性格だな」と心の中で思いながら、まずは頭に浮かんだ簡潔な一言を口にした。

「君はバカかい？」

和やかな微笑みのまま、イルドのこめかいみに青筋が浮かぶ。

ゆつくりと青筋を肌色で吸収しながら、イルドは先ほどと同じ言葉、先ほどよりも切れ味の鋭い口調で言った。

「じゃあ、なんで塵になっただ？」

イルドの質問に、リクルが「はあ」呆れるような溜息を一つこぼす。

顔を真っ赤にしながらかめかみに青筋を起てるイルドに、リクルは「器用なことするね」と感心するように洩らしながら、一口だけ含んだ葡萄酒で唇を濡らして答えた。

「この村の人口は、多少増減するけどだいたい百人前後。その全員が一週間で全て入れ替わる。つまり、もし僕たちの身体が残れば、一週間に百個の墓が必要になる。イルド、君はこのグレーゲン樹海を墓標の海にしたいのかい？」

にこやかに、爽やかに、一息で反論の余地なく完璧な説明をするリクル。

完璧に打ちのめされたイルドは、一瞬悔しそうな表情を浮かべると、次の瞬間には一転して悪だくみを思いついたように満面の笑みを浮かべた。

「じゃあ、ついでに聞くが」

なんでも、と微笑むリクルに、イルドは全力で頭をフル稼働させ、思いつく限りの疑問を発射した。

「なんで、この町の人間は寿命が7日何だ？ 生まれた途端に今の見た目になるのか？ ガキはどうすんだ？ つーか、ゼロ歳児でその身体にはなんねえだろ？ 文明の発達、興りは？ 初めからこの場所が住処だったのか？ この家の便利グッズはなんだ？ 誰が用意してるんだ？ この村の村人たちは何で歌が上手いんだ？ リクルとシェイナの出逢いは？ 二人はあとどのくらい生きてられるんだ？ この辺でお宝がある所ってあるか？」

矢継ぎ早に質問を浴びせるイルドは、息を切らしながらどうだと言わんばかりに笑みを作る。むかつく相手には真っ向からぶつかっ

ていくのもイルド流だ。

全てを腕を組みながら静かに聴き終えたリクルは、自然と浮かぶ笑みを隠すように口元に手を当てて言った。明らかに笑っている。それも、小馬鹿にしたように。けれど、その笑みには友愛の色が垣間見れた。まるで、イルドを誰かと重ねているようだ。

「イルド」

「なんだ？」

「君はしばらくこの村に居るんだろ？」

「ああ」

「だったら……」

リクルは口元から手を放し、葡萄酒のボトルを手にとるとイルドの手前にあるグラスへと傾けた。

「明日、村を案内しながら答えるよ」

葡萄酒のボトルを戻し、飲むように促すリクル。

「いいのか？ お前たちの時間は短いんだろ？」

「短い時間だからこそ、悔いの無いように生きたいのさ。それに、この村に生を受けて外の人間と友人になれるなんて奇跡的な確立だからね」

リクルの言葉に、イルドは肩を竦めて「じゃあ、頼む」と笑い、グラスの葡萄酒を口に流し込んだ。豊潤な香りが鼻に抜け、微かな渋みと心地よい余韻が口に広がる。

「だああああああああー。お腹すいたーっ！」

その余韻を吹き飛ばしたのは、壊れる勢いで押し開かれた扉から現れたシェイナの雄叫びだった。

「お、復活したのか？」

「復活？ なんのこと？」

首を回して訊ねるイルドに、シェイナは快活な笑みを浮かべ、元氣よくガッツポーズまでしながら答える。

「私はいつでも元気の塊よ」

「目元、濡れてんぞ」

「えっ！？　嘘！？　そんなはずないでしょ、ちゃんと拭いたんだから……………あ」

慌てて目元を袖で拭ったシェイナが、ひどく間抜けな声を漏らす。その視線の先で、イルドが声にならない笑い声を上げながらバシバシと机を叩いていた。向かいではリクルがとてつもなく温かな眼差しで自分を見つめている。

「……………ッ！」

言葉にならない叫び声がシェイナの喉から迸った。

シェイナは顔を真っ赤にするのと同時に、近くにあったクリスタル製の灰皿を渾身の力でイルドに向けて投げつけた。まったく高度を下げる事が無く、最短距離を飛んだ灰皿は見事にイルドの左目に命中。「グガッ！」という呻き声と、なにやら人体を破壊する音を響かせ、イルドの身体が吹き飛ぶ。両足を高々と上げ、イルドは椅子から転がり落ちた。

肩でせえせえと息をするシェイナは、ゾンビのように椅子にしがみつくイルドを睨みながら噛みつくように言った。

「死ね！」

「いや、シェイナ。今は本当に死ぬよ。せめて狙うなら胴体にしな」と

全身を怒りで強張らせるシェイナに、微笑みを浮かべるリクルが優しいフオローを入れる。あまりにも優しくすぎて、イルドは涙が出そうになった。

「いてててて。あのなあ、シェイナ。お前は何か俺の左目に恨みでもあるのか？」

夕方、シェイナに殴られた時と同じように左目に青あざを作りながら、イルドが非難の眼差しを向ける。そこへ再び浴びせられる「死ね」の二文字。どうやら、恨みは深いらしい。鬼のようなオーラが、シェイナから吹きだしていた。

どすどすと、怒りを足に込めながらテーブルへ近づいてくるシェイナ。その威圧感ときたら、まるで冬眠明けの熊だ。もうちょっと

からかつてやろうという作戦は即刻撤廃。猛獣の威圧感を前に大人しく席に戻る。イルドだってもう少し生きたい。

シェイナはテーブルを一瞥すると、小さな溜息を漏らした。

「はあ、全然ダメ」

怒りからの開口一番は、完全なダメ出しだった。

「栄養価を考えるなら、ちゃんとタマゴも入れなきゃダメでしょ。

それと、ただ野菜を取ればいいってもんじゃないの。野菜にだってそれぞれ栄養があるんだから。あと、キノコ類も。たく、コレだから男は……」

悪態を付きながらシェイナはエプロンを装備し、すぐさま足りない栄養素の準備に取り掛かった。

そんな後ろ姿をイルドが少し表情を和らげて見ていると、なにやら台所の端でござそしていたリクルがシェイナの目を盗んで布袋を投げ渡してきた。ひんやりと手の平に伝わる冷気。どうやら中身は氷らしい。腹は黒いが根はやさしい性格のようだ。

声に出さず、リクルが「ありがとうよ」と口を動かしながら、袋を目に当てるジェスチャーをする。イルドは軽く手を上げてリクルに応えると、冷たい氷袋を青あざができた左目にあてがった。

テーブルに足りなかった栄養分のメニュー（プラス甘い系多数）を加え、三人の夕食が始まった。魔法のように現れた食事にイルドは舌鼓をうちながら、旅の話のリクルとシェイナに話す。その折を見ながらイルドは幾つか質問したが、リクルは「明日話すよ」の一点張り。顔に似合わず、かなりの頑固者だった。

話しているうちに食事は最後のメインディッシュ、グライとミールが渡してくれたアップルパイを残すのみとなった。シェイナがパイを切り分け、小皿に移す。

「これは、真正銘ミールの手作りだからね。あんたたち、感謝して頂きなさいよ」

まるで自分のことを自慢するように胸を張るシェイナ。

イルドは「ああ、ありがたく頂くよ」と改めて手を合わせると、銀

製のフォークを小麦色のパイ生地伸ばした。サクツと小気味のいい音が耳を撫ぜる。一口分を口へ運ぶと、パイ生地の香ばしさと林檎の程よい酸味のある甘さが口いっぱいに広がった。

「美味しいな」

お世辞拔きの素直な感想を漏らすイルドに、シェイナだけでなくリクルも表情を和らげる。

そうして三人でアップルパイを食べていると、不意にシェイナが「そうだ!」と言って、手に持つフォークで奥の扉を指した。

「イルド、風呂に入ってきたなよ。旅のトレジャーハンターってことは、なかなかゆつくり入る機会ないんでしょ?」

「ん? いいのか、一番風呂もらっても?」

「変なところで律儀だね、イルドは。服装に関しては呆れるほど図太いの」

食後のコーヒーを楽しむリクルに、イルドが「このやろっ」と俄かに頬をヒクつかせる。

しかし、久しぶりに入れる風呂に、イルドはすぐに表情を崩すと「じゃあ、お言葉に甘えて入らせてもらっわ」と言っただけで席を立った。油断すれば鼻歌が漏れそうになる。

「そういえば、いつの間に沸かしたんだ?」

ふと、不思議に思いイルドが足を止める。リクルはイルドと一緒に夕食を準備していたし、シェイナはずっと寝室に籠っていた。風呂を沸かすタイミングなんてなかったはず。

そんなイルドの疑問に、食器を下げていたシェイナはあっけらかんと答えた。

「ああ、うちのお風呂は入りたい時に勝手に沸く作りになってるから」

「はあ? おいおい。そのオープンといい、風呂といい。お前たちの家はどんだけ便利なんだよ。つーか、何でこんな便利なんだ?」

「それも、明日教えてあげるよ」

「こんなもやもやな気持ちのままじゃ、リラックスできねえっての」

眉を八の字にして肩を竦めるイルド。

リクルはもったいぶるように間を置くと、眼鏡の位置を直しながら答えた。

「この村にはね、ドワーフがいるんだよ」

「ドワーフが？　嘘だろ？」

リクルの言葉に、イルドはこの村に来て一番驚いた表情を見せた。それもそうだろう。『知識の小人』『老人賢者』と呼ばれるドワーフはさまざまな道具を作り出す力を持っているが、そのほとんどは大変な偏屈ばかりで、まず人里にはいつかない。

そして、もう一つ。ドワーフが人里に現れない決定的な理由がある。

「ドワーフはその能力から、いつの時代も権力者に捕まったり奴隷にされたりする。だから、奴らは好んで人里に降りてこねえ。悪いことを考えるバカが、世の中には多すぎるからな」

旅先で出逢ったドワーフたちを思い出し、イルドが苦い表情を作る。胸の中に嫌な思いが広がった。自分が人間であることを嫌だと思っただけで、イルドは人間嫌いではないが。博愛精神を持ち合わせているわけでもない。嫌いな人種は山ほどいる。

イルドの言葉に、リクルが深い同意を示すように頷く。

「なんでそのドワーフはこの村に住んでるんだ？　奴らの魂には、人間に対する嫌悪感が根深く巣食ってるはずだろ」

イルドは旅の道中、幾人かのドワーフに会ってきた。例外もいたが、そのほとんどが人間との交友を断つように森や山の奥深くに住んでいる。ドワーフ自身は温厚で聡明な性格なため、害意の無いイルドを無下に扱うことはなかったが、それでも人間に対する毛嫌いは尽きなかった。

リクルたちも、七日しか生きられない身体とはいえ人間には違いない。

眉間に皺を寄せるイルドに、洗い物を終えたシェイナがエプロンで手を拭きながら答えた。

「それは、この村だからよ」

「この村、だから？」

「そつ。だって、この村の人は良い人ばかりだもん」

自分の村を一切疑わず、誇らしそうに胸を張るシェイナ。

そんなシェイナに、イルドは頭痛でもするかのように頭を押さえながら言った。

「いや、あのな。シェイナ。あんまり言いたくねえんだけど、人間はそんな綺麗な奴ばつかじゃな……」

そこまで口にして、リクルは唐突に理解した。

「ああ、なるほど。そういうことか」

「理解したみたいだね」

頷きながら口に手を当てるイルドに、リクルが口にコーヒーカーツプを当てながら相槌を打つ。

そうなのだ。この村人は七日しか生きられないのだ。

イルドはようやく、心の奥に感じていた違和感、この村の村人たちを以上に綺麗に感じた理由を悟った。初めは、その容姿や歌声が綺麗だからだと思っていた。けれど、違うのだ。この村の村人たちの綺麗さは、その「七日しか生きられない」という運命のもとで、必要以上の欲を持たないことにあるのだ。

人の人生は長い。だから人はその長い人生を満たすために、多くの財が、幸福が必要になる。そして、どれだけの財と幸福が必要なのか分からない。必要以上の財と幸福を求めるようになる。たとえそれが、他者の不幸と引き換えになろうとも。

もちろん、世界の人々が全てそうではない。だが、そういった人間は必ずいるし、誰の心の中にもそういった欲求がある。それゆえに、力を持つドワーフや精霊が狙われる。

だがこの村の人たちは、その短い命ゆえに自分に必要な財と幸福が分かるのだろう。だから、必要以上に要求しない。それが、この村でドワーフが安心して暮らせる理由だろう。

イルドが出逢ったドワーフたちは、人間から離れることを望んだ。

恨みを持つものもいた。だが、一人は寂しいものなのだ。その孤独は、イルドにもよく分かる。

寂しさを堪え切れずに人里へ近づき、そして囚われる。ドワーフたちが安心して住める村がもつと世界にあれば、イルドはそう思わずにはいられなかった。

「明日、そのドワーフのところにも連れてつてくれよ」

「ああ、そのつもりさ。もつとも、彼も君に負けず劣らずの変ドワーフだから、覚悟といった方がいいよ」

「ハハ。そうかよ」

どこか嬉しそうな笑い声を上げながら、イルドは脱衣所の扉を開けた。

「あ。そう言えば、イルド」

「ん？ なんだ？」

「君は何で旅をしてるんだい？」

イルドの身体が脱衣所に消える間際に声をかけたリクルに、イルドはジャケットの内ポケットの写真に手を当てながら少しばかり俯いて答えた。

「……人を探してるんだよ」

「人？ もしかして……逃げられた恋人かい？」

ここぞとばかりに茶化してくるリクルに、イルドは笑うことなく、遠い眼をして答えた。

「いや、どちらかっていると恋敵だよ」

「え……？」

なぜか戸惑っていたリクルの声に、イルドは軽く肩を竦めると扉を閉めた。

脱衣所と浴室はさらに硝子扉で遮ってあった。扉の下には十センチほどの隙間があり、そこから洩れた湯気で脱衣所はほのかに温かい。シェイナの言うとおり、ちょうど良い具合に沸いているようだ。

羽織っていた紫のコートを麻の服籠に放り込み、続けてガンベルトを外す。イルドから紫色の面積が減り、変わって肌色が表へと顔

を出す。順々に服を脱いでいくイルド。しかし、せっかくの風呂だというのに、彼の顔はどこか浮かない表情をしていた。

そう、まるで。絶対に会いたくない敵との対面を迫られているような。

ブーツも、シャツも、パンツも。全て脱ぎ捨て、イルドが一糸纏わない生まれたままの姿となる。解放感がイルドを包み込むが、その顔はやはり晴れない。

脱衣所に置かれた鏡に映る自分の身体を見て、イルドがことさら重い溜息をついた、その時。

不意に、脱衣所の扉がノックされた。

「イルド。タオルと適当なパジャマを用意したから、ちょっと入るよ」

「な、おいちよつと待て。こっちは裸……」

「何言ってるんだよ。男同士だろ」

イルドの妙に甲高い制止の声を気にせず、タオルと紫のパジャマを準備したリクルが脱衣所の扉を押し開く。

「え？」

リクルの眼鏡が思いつ切りずり下がり、口からひどく間抜けな声が飛び出した。

(2)

時は少し遡る。

「そつえば、イルドって着替え持つてるのかな？」

シェイナの唇からそつと自分の唇を離れたリクルは、イルドの消えていった扉を見て呟いた。

「さあ？ でも、荷物はそっちに置きっぱなしよ」

嬉しそつに自分の唇に指を当てながら、シェイナが視線をリビングのソファ―に置かれた紫のバックに目を向ける。さすがに、勝手に荷物を漁るのは気が引けた。まあ、仕返しにちよつと中を漁つてやりたい気はするのだが。

「あ、そつえばタオルもなかったかも。ちよつと待つてて、タオルと一緒に適当なのを出してあげるから」

「色は赤か青色にしてあげたら？」

「こらこら、意地悪しない」

相変わらずな夫の悪戯に、シェイナは優しく窘めながらタンスの引き出しを開ける。引き出しには、まるで前々から準備されていたかのように、タオルと紫色を基調とした質の良い下着とパジャマ一式が入っていた。一瞬、本気でピンクの一式に取り換えてやるうかと思つたが、さすがに可愛そつなので中止。ただ、タオルだけは茶目つ氣たつぷりのラブリーなピンクのものに変えることにした。

便利なタンスから出てきた着替えとタオルを取り出し、シェイナが「はい。お願い」とリクルに渡す。「ん、了解」と一式を受け取つたリクルは、そのままシェイナの頬に軽いキスをした。

くすぐつたそつに身を縮めて微笑むシェイナ。いつも笑顔を浮かべ、初対面のイルドにも愛嬌を忘れないシェイナだが、やはり本当の笑顔を見せるのはリクルだけだ。

「さてと、イルドの寢床を準備してあげようかな」

気合いを込めるように腕まくりをし、タンスから新たに数枚のシ

ーツを取り出したシェイナがソファアを寢床に改造し始める。

その姿に柔らかな笑みを浮かべたリクルは、脱衣所の扉をノックした。

「イルド。タオルと適当なパジャマを用意したから、ちょっと入るよ」

「な、おいちよつと待て。こっちは裸……」

「何言ってるんだよ。男同士だろ」

妙に慌てたイルドの声に苦笑を漏らすリクル。他人の動揺はリクルの好物だ。胸の奥がくすぐられる様に、リクルの頬が自然と笑みの形を作り出す。

さて、どうやってからかうかな

そんな期待を胸にリクルが脱衣所の扉を押し開く。

「え？」

間の抜けた声が口から零れる。ずり落ちる眼鏡。さすがのリクルも眼の前の光景に動揺せずにはいられなかった。

しまった、とばかりにしかめっ面を浮かべ、眼の前の人物がその小さな手を顔に当てる。

その顔にはどこか見覚えがある。耳に揺れるピアスにも見覚えがある。しかし、確実に眼の前の人物はリクルの知る人物であるはずがなかった。

シェイナよりも少し低い身長。ごつごつとした男性的な肌ではなく、瑞々しく柔らかな肌。バサバサな短髪の癖っ毛ではなく、繊細に浮き出た鎖骨まで伸びる滑らかな黒髪。胸は筋肉以外の脂肪によつてふつくらと実っており、逆に股間には本来あるべきものが無い。イルドが着替えていたはずの脱衣所には、見知らぬ女の子が一系まとわぬ姿で立っていた。

(3)

リクルが脱衣所の扉を開けて数秒、あるいは数十秒。

「んで、いつまで見てんだよ。見物料取るぞ」

沈黙を切り裂いたのは、いつの間にか脱衣所に居た少女だった。いや、見た目こそ少女だが口調は完全な男性のもの。しかも、「いつまで見てんだ」と言う割に少女はまったく身体を隠そうとしない。むしろ、堂々と胸を張る始末だ。年頃の女の子ならば、「イヤ〜っ！」と悲鳴の一つもあるだろうに。

まるで恥じらいの無い少女に、リクルはズレた眼鏡を直し、冷静を取り戻しながら微笑んだ。

「ならば僕は、不法侵入代をいただこうかな」

リクルらしい返答に、少女が小さな肩を竦めて苦笑する。その仕草も、表情も、やはり彼のものだ。自分の目と頭を疑いながらも、導き出される答えは一つしかない。ならば、確かめるしかないだろう。

「君は、イルドなのかい？」

「イルド？ 誰だそりゃ？」

笑いながら両手の平を天井に向けて、平然と答える少女。胸や股間を隠すつもりはさらさらないらしい。さすがのリクルとしても、これ以上少女のやわ肌を見続けるのは人として答える。

なんとも白々しい笑みは、何よりも決定的な答えだった。

呆れるように溜息を吐き、リクルは腕を組み、入口の柱に寄りかかる。爽やかな笑みを浮かべながら、初めてイルドを見た時と同じ、いやそれ以上に奇妙なものを見る視線を女体になったイルドに浴びせかけた。

「まさか、ここまで変態だったとはね」

「この格好に対して変態って言うのは止める。本気で情けなくなるから」

「おや、その恰好も君の趣味じゃないのかい？」

「んなわけあるかつ！」

リクルの言葉に、イルドが本気で嫌そうな顔をして声を張り上げる。

意外な反応に目を丸くするリクル。イルドも思わず叫んだことに、気まずげに視線を逸らす。

「ねえねえ、なに怒鳴り声上げてるの？ てか、今の声誰のよ？」

二人が次の言葉に窮していると、怒鳴り声を聞きつけたシェイナが脱衣所を覗き込んできた。「あ……」というリクルとイルドの声が重なり、その後を「……へ？」とシェイナの間抜けな声が追う。再び流れる空白の数秒間。

「イヤ~~~~ッ！」

シェイナの悲鳴が家中に木霊した。

脱衣所、見知らぬ裸の女の子、しかも可愛い。腕を組んでなぜか納得した表情を浮かべている夫。見知らぬ裸の女の子。どこにも姿が見えないイルド。見知らぬ裸の女の子。見知らぬ裸の女の子。見知らぬ裸の……女の子。見知らぬ……裸の……おんなの……こ。

「う、う、う……」

この世の全てに裏切られたかの如く絶望に顔を染めたシェイナが、涙を湛えてリクルを睨む。わなわなと震える拳。信じたい心と罵りたい激情のせめぎ合いに浮かべる苦悶の表情は、なかなか色つばいものがあつた。

溜まりに溜まつた感情は、次の瞬間に爆発した。

「このっ、浮気も……」

「シェイナ。俺はイルドだぞ」

「のおおおえええええええ？」

シェイナ再度仰天。

リクルに向けて振り上げられた拳は行き場を失い空中に停止し、口がパクパクと言葉もなく動く。まあ、何を言いたいかはその顔を見れば一目瞭然だ。イルドも鷹揚に頷く。

シェイナの反応が面白いので、イルドとリクルはアイコンタクトを取ると揃って傍観。黙ってしまった二人に、シェイナがリスのようにキョロキョロと視線を彷徨わせる。

何度もイルドとリクルの顔を往復したシェイナは、動揺を落ち着かせるように大きく息を吸うと、気持ちを新たにイルドへとその視線を定めた。

体つきは細いが、女性特有の起伏に富んでいる。むしろ、胸元は自分以上。悔しいことこの上ない。と同時に、ハッキリと言えることがある。

どこをどう見ても女の子じゃない！

心の中で叫んだシェイナが、厳しい視線を再び夫に送る。しかし、そんな妻の劫火のような視線に、リクルは涼しい顔をして肩を竦めた。夫婦だからこそわかる。リクルは嘘をついてない。

だが、シェイナはまだ信じられなかった。いや、それはある意味正しい反応だろう。むしろ、すんなりとイルドだと認めたリクルの方がもの分かりがよすぎる。

「そ、そうだ。イルド、最初から女の子だったんだでしょ。男っぽかったのは、メイクね」

とにかく自分の持てる知恵を総動員して現実的な見解を捻りだしたシェイナに、元から女説をぶつけられたイルドは、「残念、俺は最初から男だよ」と腕を交差させ胸の前で×を作った。

「な、なんなのよ。いったい？」

もはや自分の常識を超えた状況に、いつもは強気なシェイナがヘナヘナと腰を落とす。

そんな妻の珍しいリアクションに微笑みを浮かべながら、リクルは「さてと。じゃあ、そろそろ説明してもらおうかな」といって柱から身体を離れた。

「改めて訊いとくけど、君はイルドで間違いないんだね」

「ああ、こればかりは嘘じゃねえよ。残念ながら」

どこか悔しそうにイルドが視線を落とす。

ややあつて視線をリクルとシェイナに戻したイルドは、二人に「ちよつと見てろ」と言いながら、その細くなった手を服力ゴへと伸ばした。

今さらながら、裸であることが恥ずかしくなったのか？

訝しげに眉を顰めながらイルドの動きを見守っていたリクルとシェイナ。

しかし、ことはそんな単純なことではなかった。眼の前の光景に、リクルとシェイナが言葉を失くす。女の裸姿になっていたイルドに勝るとも劣らない衝撃的な光景が、二人の眼の前で繰り広げられた。男物の濃い紫のパンツに細い足を通すイルド。パンツはブルブルで今にも落ちそうだが、彼（女？）は気にせず続けてシャツを取る。この時点ではまだほとんど変化はない。膨らんだ胸も、浮き出た鎖骨もそのまま、女性の色気が漂っている。灰色ぎみの紫のシャツを頭からすっぽりと被るイルド。すると、シャツを押し上げる胸元が、心なしかさつきよりも低くなって見えた。

イルドはさらに着替えを続ける。赤紫のズボン。どう見ても長い、華奢な両足を通せば丁度よい裾丈になる。いや、ズボンの長さは変わっていない。イルドの足が伸びたのだ。気が付けば、顔つきもかなり男性的になってきている。

シャツの上からオーバージャケットを羽織るイルド。全身紫となった彼からは、完全に女性的な丸みは抜け落ち、どこからどう見ても完璧に男に戻っていた。

ぽかんとした表情で固まるリクルとシェイナ。

そんな二人に、元の男声を取り戻したイルドは、肩を竦めて自身に呆れるように言った。

「な、嘘みたいな身体だろ」

「……まっただよ」

動揺を抑えきれず、震える指先で眼鏡の位置を直したりリクルが即同意する。シェイナは依然として床に腰を落としたまま、未だに「信じられない」という視線でイルドの身体を隅から隅まで観察した。

頭、胴体、腕、腰、足。

どこをどう見ても、完全な男の体つき。

さすがに驚きの限界を超えたのか、クシャツと髪を掻いたシェイナは呆れた笑みを浮かべて立ち上がった。

そして、ビシッとイルドを指差し一言、

「この、変た……」

「つまり、紫を身に付けている時は男。紫を外したら女になるってことかい？」

「まあ、そういうことだ」

言えなかった。

夫の妨害に、シェイナが非難の視線をリクルに送る。

リクルは涼しい顔をして一言。

「今さらだよ。シェイナ」

「聞こえてんぞ。コラッ！」

直接の罵倒より遥かに嫌味な言い方に、イルドが頬を痙攣させた。罵り合いや無言のせめぎ合いなら互角に持って行けるものの、皮肉で先手を取らせたらリクルの方が一枚上手らしい。どうしたらこんなにひねくられるのか、イルドは興味すら湧いてきた。

そんなイルドの心境を知ってか知らずか、腹黒リクルはのほほんとした調子で訊ねる。

「それで、何でそんなに面白い身体に？」

「……呪いだよ」

「呪い？」

「ああ」

イルドはことさら嫌そうに頷き、苦笑しながら続けた。

「昔、ちよつと魔女の居城に忍び込んだことがあったんだよ。そしてら、その魔女がこれまた最低最悪の超ドSな奴でな。散々いろんな罠に嵌めて俺のことをおちよくりまくった挙句、最後にはこの呪いを掛けやがったんだよ」

「それって自業自得じゃん？」

イルドが男に戻ったことで、元の調子を取り戻したシェイナがささずツツコム。

苦虫を噛み殺したような表情を浮かべたイルドは、「こっちにもいろいろ事情があったんだよ」とそっぽを向いて答えた。

「事情って、何さ？」

「どうしようもなく深刻で、緊急を要する事情だったんだよ」

「へえ〜。そう」

口早に応えたイルドに、シェイナは明らかに信じてない返事を返す。どうせ。気まぐれで忍び込んだんだろう。

眼を細めてじつと見つめるシェイナに、イルドはバツの悪そうに顔を顰める。悔しさからか、笑みだけは浮かべたままだ。変なところでプライドが高いとシェイナは思った。

そんなイルドに、今度はリクルが質問した。

「なんで紫を着てると大丈夫なんだい？」

「ん？ ああ。その魔女曰く、紫は混沌の色らしくてな。男性の青と女性の赤を兼ね備えた混沌の紫を身に纏えば、男の身体を保っていられるんだとよ。まあ、熱い時はジャケットじゃなくて腕輪なんかで代用するけどな」

苦労するよ、本当に。と付け加えるイルド。

すると、眼の前ではリクルが今までで一番驚いた表情を浮かべていた。

「なんだ、リクル。何をこれ以上驚いてんだよ？」

「いや、コレが驚かずにいれられるかい？」

真面目な表情を浮かべたリクルは、眼鏡を押し上げながら本当に深刻な口調で続けた。

「僕はてつきり……イルドのその恰好は酔狂でやってるとばかり思ってたのに」

「……………お前も大概、いい性格してるよな」

もはやツツコム気も失せたイルドに、リクルはコロツと表情を変え「何が？」と気持ちの良い笑顔を浮かべて答える。

イルドは「はぁ」と苦笑交じりの溜息を吐き出すと、自分がしよ
うとしていたことを思い出し、浴室のドアを指差して言った。

「んで、そろそろ風呂入ってもいいか？」

イルドの二度目の自己紹介は、こうして足下から立ち上がる湯気
と共に幕を閉じた。

第二章『これはまた、奇妙なところに連れてきやがったな』（1）

「ん……うんん……。ふああ」

窓から差し込む朝日に、シェイナはようやく目を覚ました。ベッドの中で丸めていた身体を伸ばして、素肌を覆っていた布団を持ち上げる。ちよつと気だるいが、気分はなかなか爽快だ。

そつと耳を澄ますと、窓の外から歌声が響いていた。今朝も誰かが歌っている。自分の最愛の人に向けて、自分の最愛の人を求めて頑張れ、とシェイナは唇だけ動かして声に出さず呟いた。

そんな健康的な心模様に陰りが指す。傍らの喪失感。

リクルはすでに起きたのか、ベッドの隣はもぬけの殻になっていた。

じつと、空のシーツを見つめるシェイナ。昨日の晩のことを思い出し、その顔に朱が走る。なかなか濃厚な夜だったようだ。

シェイナはキヨロキヨロと誰もいない寝室を注意深く確認すると……、バフツと音を立てリクルが寝ていたシーツに顔を押し付けた。ふわつと広がる太陽の匂いに混じり、ほのかな汗の匂い。でも、不思議と心地いい。これが惚れた弱みなのだろうか。

息が苦しくなるほどシーツに顔を押し付ける。苦しくなるほど顔がにやける。リクルを選んで良かった。後悔はない。ただ、少しだけ会えなくなった人への寂しさが蘇った。もう一人の親友。あいつは今、どこで何をしているだろうか。

「……起きよ」

リクルと自分ともう一人、数日前の記憶に蓋をしたシェイナは、パシンと一発頬を叩いて身体を持ち上げた。彼はいなくなってしまうけど、代わりに変態がやってきた。そいつと夫に朝ごはんを用意してやらないと。

「昨日の晩は準備を任せちゃったから、今朝は全部ちゃんと準備してやらなきゃね」

シェイナはいそいそと服を着ると、寢室の扉を開けた。

「あれ？」

扉のノブを握ったまま、シェイナが首を傾げる。リビングもダイニングにもリクルの姿はない。ついでに、ソファアーに寝ていたはずのイルドの姿もなかった。

散歩にでも行ったのだろうか？

昨晚、リクルがイルドに村を案内すると言っていたことを思い出す。それなら、自分も連れて行って欲しかった。寂しさとむかつきから口をすぼめるシェイナ。だが、もしかしたらリクル達は自分に気を使ってくれたのかもしれない。グライとミリーが逝って昨日の今日だ。正直、自分自身まだ整理がついていない部分はあった。

人が死ぬのが日常茶飯事であっても、やはり親しい人の死は悲しい。

シェイナの大きな眼が悲しげに細まり、視線が落ちる。ギュツと、ドアノブを握る力が強くなる。

誰もいない部屋は寂しさを増幅させる。寂しさは嫌な想像をかき立てる。リクルはシェイナより先に生まれた。その事実が現実となる日はすぐ傍だ。

「アイツら、いつ帰ってくるかな……」

思わず漏れた弱音に、シェイナがハツとして口に手を当てる。誰かに聞こえてなかったか。誰もいないと知っているはずの部屋を見渡し、やっぱり無い人影にほっと息を吐く。

吐いた息を大きな深呼吸で取り込んだシェイナは、いつもの力強い笑みを浮かべて「よしっ！」と強く頷いた。ついでとばかりに袖をまくり、エプロンを着けて臨戦態勢を整える。

テーブルには朝食を取った後は無い。ということは、二人が帰ってくるのはそんなに遅くはならないはず。それに、てきとうに歩いているならお腹を減らして帰ってくるはず。

昨晩はすでに出来上がった物を取り出したが、朝はちゃんと手料理を振まつてあげたい。自分に朝食をせがんでくる情けない二人の

姿に、シェイナはぷつと吹き出した。

「よし、やるぞ！」

自分の不安を払拭するように一段と気合いを込めたシェイナは、意気込んで朝食作りに取り掛かった。青野菜を取り出し、包丁で手際よく切り簡単なサラダを作る。男の子であるリクルとイルドのことを思い、チーズを加えてちよつとこつてり系に。続けてクリームスープを手際よく作りつつ、ライ麦パンを切ってオーブンへ。パンの焼ける香ばしい匂いと、スープが煮える甘い香りがキッチンに立ち込める。

食欲をそそる香りが増すキッチンで、シェイナは自然と歌っていた。

「窓から朝日が差し込むよ

君のいないベッドを照らすよ

寂しさが込み上げて

それでもやっぱり恋しくて

あなたの残り香と戯れた

夢のような孤独の中で

君たちを待つて作る料理

君たちを想つて作った料理

並ぶよ並ぶよ並べるよ

サラダにスープ。ジュースも添えて

速く早く帰つておいで

美味しい料理が待つてるよ」

旋律に合わせ踊るように料理を続けていたシェイナが、ふとその手を止めた。

「メインはお肉にしようかな。いや、やっぱり魚もいいかも」

腕を組みながら、トントンと爪先で床を叩く。悩ましい表情は、すぐに豪快な笑みに変わった。

「悩んだら、やっぱりどっちもよね」

なんとも気持ちのいい結論を出したシェイナが、いよいよメインの料理に取り掛かる。肉はチキンに決め、まずは叩いて柔らかく。程よく焼けたパンをオーブンから取り出し、鶏肉に軽く塩コショウを振って下味を付けたらブロccoliやニンジンと共にオーブンへ。続いて魚を取り出した時、不意に玄関の扉が開き、柔らかな朝日が差し込んできた。

「あ、良い匂い」

「リクルっ！」

無意識に大きくなる声。朝日を背負って現れたリクルは、空色のオーバオールを着こみ片手にシヨベルを持ち、いつも通りの嘘っぱい笑みを浮かべて立っていた。

「あれ？ 花壇の手入れしてたの？」

「うん。そうだよ。というか何で疑問形？」

「てつきりイルドを案内してたのかと思ってたから……」

ちよつと拗ねたように答えるシェイナ。

そんなシェイナにリクルは笑みを濃くして歩み寄ると、無言のまま唇をそつと重ねた。

目を丸くして固まるシェイナに、唇を放したリクルが寝癖のついた妻の髪を撫ぜながら目を細めて微笑む。

「君を、置いて行くわけないだろ」

「リクル……」

じゅんつと、シェイナの胸の中を温かなものが満たした。

「イルドなら銃の鍛錬に出かけたよ」

「そ、そうなんだ……」

鍛錬……音がしないってことは少なくとも近くにはいないだろう。つまり、今ここで何をしても、聞こえるはずがない。いや、それ以前に帰ってくるまでもう少し掛かるだろう。

そう思うと、物足りなさがこみ上げてきた。軽く触れるだけじゃなくて、ぎゅつと力強く抱きしめてほしいという衝動に駆られる。

でも、それを一気に押し出せるほど、シェイナは積極的にはりきれない。でも……せめて、もう一度。

「リクル、あのさっ！ あの……さ」

シェイナの視線が部屋の中を彷徨う。すぐ近くにあるリクルの顔を直視できず、自分の「お願い」が言葉にできない。

「ん、なんだい？ シェイナ」

視線が定まらないシェイナとは対照的に、リクルは細めた優しいげな目を真っ直ぐにシェイナに向けていた。どこまでも穏やかな笑みは、どこまでも意地悪な笑みでもあった。

「だからさ、もう一回、さ」

「ん、なにが？」

リクルの微笑みが濃くなる。紳士のような詐欺師の笑み。腹の底が見えない笑みを浮かべる瞳は、悪魔も真っ青な加虐的な喜びに満ちていた。「言わせるまで、やめないよ」。無言の唇が囁く。

バカ、いじわる。と、シェイナも精一杯に瞳で訴える。啖呵ならいくらでも切れるシェイナだが、こういったものにはいまだに初心なのだ。伝えられないもどかしさと、羞恥心。そして、そんな自分とリクルが嫌いになれないというおかしい気持ち。しつとりと濡れた手が、弱弱しく宙を掴む。

恥ずかしさが限界に達し震える体を、「どうしたの？ 寒いかい？」とリクルが優しく包み込む。嬉しいけど、違う。シェイナが望んでいるのは、先ほどの不意打ちの……

「……ス……てよ」

「聞こえないよ。もう一回言って」

耳元で囁くリクルに、シェイナは顔をリンゴのように赤く染めながら、消え入るような声で呟いた。

「キス、して」

「はいはい。喜んで」

顔立ちに似合わず、ガーデニングで硬くなった手のひらがシェイナの頬を撫でる。ようやくもらえるご褒美に、胸が高鳴る。リクル

の唇が間近に迫……

「あーあ、チキン焦げてるぞ」

さっと血の気が引く。目の端を、奇妙奇天烈な紫の物体が横切った。

紫に身を包んだ奇妙な生き物が、オーブンを開けて中から表面が焦げ始めたチキンを取り出して皿に盛り付けている。

「え、イルド？」

いや、答えるな。頼むから、答えないで。

「よお、シェイナ。のろけるのはいいけどよ、火の元はちゃんと見ないとな」

涙が目に溜めるシェイナの願いは、「あちちち」と耳たぶを摘むイルドに見事に撃墜させられた。

「ちょ、ちよっと。なんでいるの？ 銃の鍛錬に行ったって、リクルが」

恥ずかしさが混乱に代わり、頭を抱えたシェイナがイルドに問いたです。

イルドは、肉汁を吸ったブロッコリーをつまみ食いしながら答えた。

「ん、ああ。鍛錬はしてたぞ。この家の庭で」

「庭でって。そんな、音なんか全然してなかったわよ」

「ん、音？ あははは、音なんかするわきゃねえだろ。イメトレなんだから」

「イメ……トレ？」

よろよろとリクルに寄りかかりながら、シェイナがイルドの言葉を復唱する。

「ああ、そうだ。弾丸は高価だからな。そうそう無駄うちは出来ねえし。それに、朝っぱらから銃をぶっ放したら迷惑だろ。だから俺はいつもイメージでトレーニングしてんだよ」

「で、でも。リクルは……」

さすがのように上目使いで見上げてくるシェイナに、リクルはあの

加虐的な慈悲深い笑みを作りながら答えた。

「僕はイルドが家から『銃の鍛錬に出かけた』って言っただけで、遠くに行った』なんて言ってなかったはずだよ」

まったく自分に落ち度はないと語るリクルに、シェイナは最後の希望を乗せてイルドに訊いた。

「どこから、見てたの？」

「『だからさ、もう一回、さ』って、ところから」

シェイナの声色を真似て、イルドが真面目な顔をして答える。

その顔は笑っていなかった。

「あはははは、そうなんだ」

乾いた笑い声を上げながら、シェイナはリクルを押し退けると、家にあるフライパンの中で一番重くて硬い一振りを握りしめた。

うふふふふ、と嫌に楽しげな笑い声が背中越しに聞こえてくる。

ブンブンとフライパンが重い音を立てて風を切る。素振りには気合が入っていた。フォームが綺麗なところが、さらに一層怒りの深さを感じさせる。イルドとリクルの顔に生じる焦燥。二人は申し合わせたかのように回れ右し、ぬき足差し足で玄関の戸を目指す。

「どこ、いくの？」

二人を呼びとめる優しすぎる声。リクルは早々に眼鏡を外した。覚悟を決めた友に、イルドも仕方ないと溜息を零しながら、東方で習った「ネンブツ」という祈りを唱える。

「じゃあ、二人とも。ご飯ができるまで、もうちょっと寝ててね」

家の中に連続して鳴り響く金属音。

イルドが朝食にありつけたのは、それから三時間ほど経ってのことだった。

(2)

うららかな昼下がり。セケイダ村は美しい歌声に満ちていた。今日の陽気を想い、美味しかった昼食を想い、新しい出逢いを想い、友を想い、なにより自分の最愛の人を想い。まるで村そのものが歌っているようだ。いい国と悪い国で言えば、比較的悪い国に立ち寄る機会の多かったイルドにとって、心が洗われる気持ちになる、そんな心地よい歌声に耳を委ねながらイルドが案内されたのは、村の奥にあった螺旋状の奇妙な塔だった。仰々しく建てられた塔を囲う鉄柵の外から観察するに、塔の直径は少なくとも三〇メートルはある。

「すっげーもんおっ立てたんだな」

手で庇を作りながら、赤褐色の塔のてっぺんを仰ぎ見るイルド。感想は「高い」の一言に尽きた。世界で最も布教しているロザリオ教の聖書には、神が降りてこられるようにと人間が塔を造り神の怒りを受けた、という話があるが、この塔は本当に天にも届きそうなある種の威厳を湛えている。

「どうだい？　なかなかのものだろ」

「ああ、すげーすげー。で、これなんなんだ？」

「本当に君は素直だね」

温かい眼差しを向けてくるリクルに、イルドが「ちゃ、茶化すなっ！」と顔を赤くして声を上げる。「褒めてるのに」と続けるリクルの隣では、必死に笑いを堪えるシェイナがバンバンと夫の肩を叩いていた。

二人の波状攻撃に、イルドがムツと顔を歪める。

対してリクルは心底面白そうに笑みを浮かべながら、「問題です」と言っ人差し指をピンと立てた。

「この塔の階層は何段あるでしょう？」

「階層？」

首を傾けながら、イルドは視線を地面から徐々に上に持ち上げて螺旋の数を数え始めた。

1、2、3、4、5、……………

指差し数えていくが、らせん状の建物はとにかく数えにくい。途中に二度ほど数え間違いをして、そのたびに一段めから数え直す。三度目のトライで、ようやく階層を数え終えた。

「……………二十か」

「ぶー、残念。正解は十八だよ」

楽しそうに正解の数を口にするリクルに、イルドが「くうっ」と悔しそうに眉を寄せる。そんなイルドの肩が誰かに掴まれた。視線を流すと、口を手で押さえたシェイナが、「ぷくくくく」と押さえきれない声を漏らしながら小刻みに震えている。

「しょうがねえだろ！ グルグル回ってて数えにくいんだよ！」

「回ってるのは、あんたの脳味噌と目ん玉でしょ」

涙目になりながら、にいつと笑うシェイナ。

イルドは喉まで出かかった悪態をグツと飲み込むと、恨みがましく塔を睨みつけ、もう一度数を数える。四回目の挑戦は、明らかに数段残っている状態で十八を超えてしまった。

「どうする、五回目いつとく？」

「いや、もういい」

情けなく肩を落とすイルドに、シェイナは励ますようにその肩をポンポンと叩く。ただ、口からは「ぷくくくく」という笑い声は漏れたままだった。

「んで、結局これは何なんだ？」

どこか疲れたように訊ねるイルドに、リクルはどこか優越感に浸っていた笑みを引っ込め、とても柔らかな笑みを塔に向けた。

「【ゆりかご】。僕たちが産まれた場所だよ」

「お前たちが、産まれた？」

「うん。昨日、イルドは訊いたよね。『生まれた途端にこの姿になるのか？』『子供はどうする？』って。その答えが、あの【ゆりか

「ご」なのさ」

慈しむように塔を見上げるリクルは、その視線を最愛の妻に向けて続けた。

「僕たちはあの【ゆりかご】の中で子を産むんだ。子は【ゆりかご】の中であらゆる災厄から守られ、十八年後に生まれ出る。例えばこの世が滅んでも、この【ゆりかご】だけは朽ちること無く僕たちの子を守ってくれるんだ。ついでに、生活の知恵まで教え込んでくれる優れモノだよ」

「スリーピングシエルター（睡眠学習基地）……。いや、けど。こんな原始的な場所で」

イルドは科学が異様に発達した国で見た睡眠学習装置を思い出した。だが、これは規模が違う。一八年ものあいだ生命維持をこなしつつの学習入力など、以前の国の技術を持っても容易なものではない。しかも、この塔の中には何千、いやヘタをすれば何万人もの子が眠っているのだろう。それだけの人数をまかなうことなど……。

「コイツのエネルギー源はなんなんだ？」

真剣な顔をして考え込むイルドに、リクルは「さあ」と肩を竦めて軽く答える。

「『さあっ』……て、気にならないのかよ？」

「まったく気にならないって言ったら嘘になるけど、気にしても仕方がないからね。僕たちを守ってくれるありがたい塔、僕たちの子を未来へ届けてくれる【ゆりかご】。それで、十分じゃないかい」
塔に向けて畏敬の眼差しを向けるリクルに、イルドは軽く眼を閉じて「ふっ」と微笑みながら肩の力を抜いた。リクルの言うとおりヘタな詮索は野暮というものだろう。

眼を開け、イルドが再び眼の前に立ち聳える尊厳な塔に視線を向ける。まるで、少しでも太陽に近づこうと天空へと渦を巻く螺旋。
大きな命の塊。たくさんの未来の集合体。

鉄柵の向こうでリクルを見下ろす【ゆりかご】の中に眠る子供たちは、どんな夢を見ているのだろうか。

イルドが逢うことのできない子供たちに思いを馳せていると、不意に塔が淡く輝き出した。

「な、なんだっ!？」

思わず声を漏らすイルド。手で作った庇の隙間から、太陽の色に良く似た山吹色の光が差し込む。

「産まれる」

落ち着いた様子のリクル、興奮したシェイナが同時に叫んだ。

眼も開けられないような強い閃光が徐々に引き、再び塔の輪郭が顕わになる。しかし、顕わになったのは塔だけではない。

「誰だ？」

引き潮のように収まる発光が、人のシルエットを浮かび上がらせる。光によって黒く塗り潰されていた姿が徐々に色彩を帯び、完全に塔がその輝きを納めると、一人の少女がそこに立っていた。

「ん、んくん、ふあ……」

眼をしばしばさせながら、たった今眼が覚めたばかりに少女は大きく伸びをする。胸と下半身だけを隠した簡素な服。垣間見える身体はスポ　チィで、どこか野生的な魅力が溢れる彼女もまた、美女と呼ぶに相違ない姿をしていた。

さしものイルドも、目の前の光景に困ったような表情を浮かべて頭を掻いた。まさに奇想天外。自分も相当おかしい奴という自覚はあるが、この村にはとことん驚かされる。

イルドがさらにこの村に対する関心を深めている傍で、嬉しそうな顔を浮かべていたシェイナは少女へと走り出していた。

「こんにちは、はじめまして、おはよう」

三通りの挨拶を一気に放出し、満面の笑みを浮かべたシェイナが手を差し出す。

「わたし、シェイナ。あなたは？」

差し伸べられた手に、少女は太陽のような潑刺とした笑みを浮かべながら、硬くその手を握り返した。

「うちはミロだ！」

元氣いっぱい自分の名を名乗ったミロの視線が、今度はリクルとイルドを捉えた。まるで獲物を捉えるネコ化の猛獣のような眼だ。ペロツと唇を舐めるところが、より一層彼女の野生的な魅力を際立たせる。

「あれ、どっちかもらってもいい？」

「眼鏡の方はダメ。私のだから、紫の方がご自由にどうぞ」

「んゝ、やめとく。なんか、頭悪そうだもん」

「こらこら、人を見た目で判断するんじゃないねえ」

心外な物言いにすかさずイルドが反論すると、ミロは子供っぽく舌を出して「ごめんごめん」と両手を合わせた。調子のよい彼女の人柄に、イルドは毒気を抜かれたような気分になる。

「さてと、じゃあそろそろ行こうかな。シェイナたちも、どうか向かってる途中だったみたいだし」

「まあね。あつて早々、気を使わせちゃったかな」

「いいっていいって。あ、そうだ。今空いている家教えてよ、もうお腹ぺっこぺこでさあ」

お腹を押さえながら少し力が抜けた声で尋ねるミロに、「それなら」とそれまで事態を静観していたリクルが口を開いた。

「うちの隣に来るといいよ。ちょうど空いているから」

「ホントっ！」

「ああ。町の中央から南側へ行つた六つ目さ」

「お花畑がある家の隣よ」

リクルの説明とシェイナの補足を聞いたミロは、両手を挙げて飛び跳ねた。

「やったー。お隣さんと、家確保！ あとは、旦那だね。よし、いい男捕まえるぞ」

「僕のおすすめは、こつちの変態だね。お風呂一緒に入るときなんか、びつくりするよ」

「俺は脱いだらすごいぞ」

いい加減「変態」と言われることに慣れてきたイルドは、悪い笑

みを浮かべながらリクルの話に乗った。二人の会話をどう捉えたのか、ミロが探るようにイルドを凝視しながら、隣のシェイナに耳打ちする。

「ほんと？」

「まあ、まあ。驚くと思うわよ、間違いない」

あいまいに答えるシェイナに、ミロは「ふうん」と頷くと勢いよくイルドを指差した。

「候補には入れといてやろう」

「それは光栄です。お姫様」

リクルと一緒にいた影響か、イルドは一晩でかなり腹が黒くなってきた。慇懃無礼に頭を下げるイルドに、ミロはますます訝しげな顔をする。

そのとき、ミロのお腹から「ぐうー」っとかわいらしい音が鳴った。

「お腹すいたから、もう行くっ！」

そう言うと同時に、ミロは「じゃあね、シェイナ」とシェイナの肩を軽くたたくと、村へ向けて走り出した。

どんどん小さくなっていくミロの背中。その背中が完全に見えなくなつたから、イルドは肘でリクルの脇腹を突いた。

「いいのか？」

「何が？」

「『隣の家に』だよ」

イルドの言葉に、リクルは心底意外そうな表情を浮かべた。

「びつくりだよ。イルドって、気を遣える人だったんだ」

「茶化すなよ」

軽い調子で答えるリクルに、イルドは今度は乗らずに真剣なまなざしで尋ねる。

やや間を開けて、リクルは「ふう」と息をつきながら答えた。

「感傷に耽るのはもう終わったよ。それに、誰もいないほうが喪失感がますしね」

再び柔らかな笑みを浮かべてリクルがシェイナに視線を流す。イルドは「……そうか」

とだけ相槌を打つと、それ以上言葉を紡ぐことをやめた。

ただ、心の中で思う。

亡くした人。それは果たして、他人で補うことができるのか、と。

「二人で何話してるの？」

首を傾げながら近づいてくるシェイナに、イルドは頭に浮かんだ考えを霧散させると、「女には聞かせられない話し」と言つて、適当にはぐらかせに出た。だが、思った以上に効果があつたようだ。シェイナの顔が、一気に赤くなる。今日もまた、左目にいい一発がおみまいされた。

「イルド、少しは学習しようよ」

「悪いな、頭が悪いのが自慢なんだよ」

「あつそ。じゃあ、しょうがないね。ところで、そろそろ次のところへ行きたいんだけど」

「いたわる気持ちはゼロなんだな」

「当然」

いつそ清々しいくらいに即答され、イルドは口の中で悪態を漏らしながらも、歩き出すシェイナとリクルの後を追った。

塔の次にイルドが案内されたのは、村の西側にあつた一軒の工房だった。工房の規模は大きく、リクルたちの住んでいる家の二倍ほど。外には大きな石釜が建てられており、屋根にそびえる煙突からは、もうもうと橙色の煙が上がっている。今も中で何か作っているようだ、一体全体どんなものを作ろうとしたらあの橙色の煙が上るのだろうか。

しかし、それ以上にイルドの目を引いたものがあつた。それは工房の裏手を埋め尽くした数えきれない墓標だった。

緑の大地を埋め尽くす果てしない墓標の海。百や二百という数ではない。一つ一つに花が添えてあり、瑞々しいところを見ると、数日に一度は置き換えているのだろう。普通なら寂寥が漂う墓地も、

並べられた花のおかげで一種の憩いが醸し出されていた。

「これはまた、奇妙なところに連れてきやがったな」

「家主に会う前からそれじゃあ、身が持たないよ」

にこやかに笑うリクルに、イルドがこの後現れるであろう家主を重い複雑な表情を浮かべながら後ろ頭を掻く。

そのとき、イルドは目の前の墓地の違和感に気が付いた。同時に、昨日の光景、体を塵芥へと変えていくグライとミリーの姿がフラッシュバックする。

「ちよつと待て、なんでこの村に墓があるんだ？」

今際に扉を開けようとしていたリクルを、イルドの疑問が呼び止めた。

そつだ、考えてみればおかしな話なのだ。この村の人間は、七日という生を終えればチリとなり大地へと変える。ならば、墓に納めべき遺骨はない。遺骨がなくなるとも墓を建てようと思えば建てられるかもしれないが、そつだとしたら墓の数が少なすぎる。

リクルは言った。セケイダ村の人口は100人前後。一週間でその全員が入れ替わる。だとすれば、墓の数は目の前に見える比ではないだろう。

イルドの疑問にリクルは扉のノブにかけていた手を一度引くと、その眼鏡の奥に潜む目を細めながら、墓標へと視線を流した。

「イルド、君が昨日見たように、僕たちの体は死ねばチリとなりセケイダ村の土に帰る。でも、それは寿命で死んだときなんだ」

「寿命？」

「ああ。僕たちの中には、ごく稀にだけど、ひどく体が弱く生まれる者がいるんだ。寿命を全うできない一番の理由はこれだね。あとは、病気になることだつてあるし、不慮の事故だつてないわけじゃないんだ」

故人を想うリクルの表情は、どこか寂しげだった。その寂しさに誘われたかのように、一陣の風が墓地に吹き込み、青々とした芝を巻き上げる。もっと生きていたかった、まるで見えない何かが叫ん

だ気がした。さらに一陣の風が吹く。墓地に添えられた花びらが舞い、石色の墓地に色彩が浮かぶ。もっと誰かを愛したかった。故人の魂の叫びが、風と共に舞い上がり、野山へと流れていく。

傍らのシェイナの頬を撫ぜながら静かに先人の魂を見送るリクルは、彼らの帰って逝った遥かな空を見つめながら続けた。

「なぜそうなのかわからない。でも、僕たちは寿命以外で死んだとき、その体は朽ちることがなく死んだ時のまま残り続ける。まるで、今もなお生きてるように。死者の軀は、土に帰ることはできないんだ」

土に帰ることができない。その言葉には、強い悲しみが込められていた。

リクルの言葉の真意を、イルドは敏感に感じ取る。セケエーダ村の住人は、人を愛し、子供を産むためにその全てを捧げている。しかし、彼らは自分の子を育てることはできない。その代わりに、彼らは土と帰り、このためにセケエーダ村の土壌を育む。それが叶わなくなることは、彼らにとって筆舌しがたいものなのだろう。

湿っぽい雰囲気になり、イルドはもう一度後ろ頭を掻いた。どうにも、こういう雰囲気は居心地が悪い。

「俺は墓参りになんてこねえからな」

冗談交じりに言ったイルドに、リクルは一瞬きよとした表情を浮かべると、次の瞬間には暗い雰囲気を霧散させ「こっちも願い下げだよ」といつもの調子で答えた、その時。

「コラコラコラコラコラコラコラコラッ！ 誰だ誰だ誰だ誰だ誰だ誰だっ！ わしの家の前で辛気臭い空気を垂れ流しとるやつはーっ！」

突如として工房のドアが内側から吹き飛び、中からイルドの腰丈ほどのドワーフがハンマーを片手に飛び出してきた。

「コラコラコラ。お前たち、いい若いもんがそろいもそろって、何をお墓参りなんかしてやがるんだ。今日の天気を見る。晴れ、蒼天、快晴真っ盛り。絶好のピクニック日和だろうが。おいしい弁当と、

うまいワイン。最高だろうがっ！　ちよつと気持ちが乗らないなら、家に帰って本でも読んでろ。本はいいぞ。先人の知恵をなんでも与えてくれやがる。こつちが望んでいようがいまいが関係なしだ。ときには古臭い言い回しもありがやるが、それはそれでいいもんだ。ああ、でも。哲学の本はやめとけ。お前らの寿命じゃ、読んでいらんことばかり考えて、せつかくの婚期を逃しちまうぞ。読むならポエムだ。読むのが面倒なら、自分で書きやがれ。いや、お前たちには必要ないか。お前たちには歌がある。ほれ、どうした。歌え歌え歌え、今日も明日もぴーちくぱーちく、うるさいッたらありやしねええ。どいるもこいつも、めちゃくちゃいい歌じゃねえかこの野郎。さつさとかわいいガキをこしらえろ。心配すんな。何十年先だろうが、ちゃんとわしが見といてやるぞ。ん、なんだ？　お前だれだ？　誰に断わってわしのことを見ている。ん、ん、ん？　食っちまうぞー！」

ハンマーを振り回しながら、さながら機関銃のように言葉を連射するドワーフに、イルドは啞然とした表情をして言葉を失った。ずんぐりむっくりな矮躯、身体と同じくらいある大きな頭、地面に引き摺りそうな長い髭。

どこからどう見ても生粋のドワーフだが、イルドの知るドワーフとは決定的に違う部分がある。

ドワーフはこんなにしゃべらない。

イルドが呆氣にとられていると、ドワーフの機関銃が再び火を噴いた。

「なんだなんだなんだ？　お前のその恰好は？　紫・紫・紫！　キシリス高原にいるキシリス蝶だってもつとマシなセンスしてるぞ。お前の眼はどうなっている。もつと世界に目を向ける。せかいにやあ、綺麗な色がわんさかあるんだぞ。いや、紫だっといういい色だ。俺は好きだ。だがなあ、それだけじゃあないだろう。そうだ、待ってる。いいものがあつた」

びゅーんと音がするほど勢いよく工房の中へ駆けこんで言ったド

ワーフは、ほんの数秒後、持っていたハンマーを置いて手ぶらで帰ってきた。

「コレを着やがれ」

「いや、これって？　どれだよ」

腕を突き出してくるドワーフに、イルドは怪訝な顔をして答える。いくら目を凝らしても、ドワーフの手には何も見えない。一応リクルとシェイナに目配らせてみるが、二人も見えていないらしく、首を横に振るだけだった。

不思議そうな表情を浮かべる三人に、ドワーフは「ちょっとまってる」と言っと、何かを着る動作をし始めた。もぞもぞとずんぐりむつくりの身体をコミカルに動かし、頭と腕を通す。

次の瞬間、それまで作業着だったドワーフの服が、貴族に仕える執事達が着るような燕尾服に姿を変えた。

ほけ／＼とした表情を浮かべるイルド達に、ドワーフが「フンッ、どうだ」と鼻を鳴らす。

「七色蚕の繭に擬態カメレオンの唾液を染み込ませて作った特別製の服だ。これを着りゃ、思った通りの色と形の服になる。さあ、これを着やがれてんだ」

「あ、いや。俺の場合はちょっと理由があつて、こういう服しか着れね……」

「なんだと！　紫の色の服しか着たくないだと！　バカか？　馬鹿か？　莫迦なのか？　あいにくとうちには薬草はあるが、バカに付けるクスリはねえぞ。代わりに毒草ならくれてえやら。バカは死ななきゃ治らねえからな。よっしゃ、待つてろ。今すぐに調査してやらあ。おい、ミストリア！　すぐに、クゲル草に永眠の種、ミグルスの湧水に、チドルネズミの足を準備しろ」

「わかりました、マスター」

ドワーフの機関銃が止むと、工房の奥から一人の少女が現れた。年はまだ幼く、純朴な顔は無表情で人形のようにすら見える。

ミストリアと呼ばれた少女は、外にいたイルド達に気が付くと、

丁寧に腰を折った。

「いらつしゃいませ、リクル、シェイナ、紫の人。準備が整うまで、どうぞ工房の中にておやすみください」

「準備って言うのは、俺を眠らせる準備のことか？」

「マスターがそう言うのであれば」

淡々と述べるミストリアに、イルドは「だったら、俺は帰るぞ」と笑いを噛み殺しながら答える。すると、再三にわたってドワーフの口火が点火した。

「何だと？　なんだと？　なんだとー！？　せつかく訊ねてきたのに、茶も飲まずに変えるのか？　どんな礼儀知らずだ。礼儀を知らねえのは恰好だけにしろ。人の家に来たらまずは名を名乗れ。それが礼儀だろうが。その性根叩き直してやる。ワシの名はドワーフのドグドだ。いいか、一回で覚えろよ。それとアクセントには気を付ける。初めのドには友好を込めて優しく、後のドは尊敬を込めて強く呼ぶんだ。わかったな。間違うんじゃないぞ。悲しいじゃないか、こんちくしょう」

「ドグド、だな。俺はイルドだ」

「イルドウ、だな」

「綺麗に発音してんじゃねえよ。イル「ド」だ。ドルドのドと同じ」「イルド、イルドだな。よし、憶えたぞ。お前の名前は、ちゃんとワシの脳細胞の末端に記憶しておいた。顔は覚える自信がねえが、その恰好はちゃんと覚えたぞ。次に会う時もちゃんとその恰好してやがれよ。わかったな」

ドグドが鼻息荒く言い終えると、いつの間にか工房に戻っていたミストリアが再び現れ、「マスター」と声をかけてきた。

「調査の準備が整いました。いらしてください」

「ミストリア、コイツを眠らせるのはまた今度だ。こいつらはすぐに帰る。いいか、温かい紅茶と、茶菓子を用意してやれ。音符鳥も忘れるな。午後のティータイムにピッタリの奴を用意してやるんだ。椅子と机はワシが準備する！」

「かしこまりました、マスター」

ミストリアが丁寧に頭を下げ、その傍らをドグドが駆け抜ける。すぐに工房の奥の方でトンチンカン、トンチンカンとハンマーを振るう音が聞こえてきた。まさか、今から机と椅子を拵える気なのだろうか？ すぐに帰す気はさらさらないらしい。

「行こうか。紫の人」

にこやかに笑い、工房に入促すリクル。その後ろでは、シェイナが笑いを噴き出している。どうやらツボに入ったらしい。理由を知っているなら、もうちょっと擁護してほしいものだといルドは思うが、いまだに注意する気にもなれなかった。

「何やってやがんだ。とつとと入ってこい」

扉の無くなった工房の奥から。ドグドの雄叫びが響く。

イルドは苦笑いを浮かべて後ろ頭を掻くと、工房に足を踏み入れた。

(3)

「へー、これはまた」

工房の中を見たイルドが感嘆の声を漏らす。ドグドの工房は、さまざまな雑貨に埋め尽くされていた。他のドワーフの工房で見たことがあるものも何点があったが、ほとんどは初見。家具類が多いのが特徴的だった。

「ちなみに、家の一日で花が咲く【日花の種】もドグドからもらったものだよ。普通の花じゃ、咲く前に僕たちの寿命が尽きるからね」リクルが手近にあった瓶詰めの種類を一つ取り出しイルドに渡す。

【日花の種】、イルドも名前は聞いたことがあったが実物を見るのは初めてだ。王国の珍品好きの貴族たちに売れば、さぞいい金になるだろう。

【日花の種】だけでなく、ドルドの工房は目に入る部分だけで、売れば三世代は遊んで暮らせるような宝の山だ。もともと、やはり家具類が多く、旅人のイルドにすればあまり惹かれないお宝であるが、商人たちが見たならば何としても手に入りたい逸品ばかりだろう。

確かに、ドワーフが住むにはいい環境だ。

イルドが一人頷いていると、鼻孔を甘い香りがくすぐった。

「皆様。お茶の用意が整いましたので、どうぞこちらへ」

ミストリアの案内する方向を見ると、立派な白椅子に腰かけたドルドが「早くしろっ！」とテラスから腕を大きく振ってイルド達を呼び寄せていた。

イルド達が工房を訪れた時、今テラスがある方向には壁があったはず。まさかとは思うが、この短時間でテラスまで作り上げたらしいドルドの神業的な職人芸に舌を巻きながら、イルドはリクル達と共にテラスの椅子に腰かけた。

「どうぞ」

カフェテリアの店員のような慣れた手際で、ミストリアがイルド達のカップに紅茶を注ぐ。蜂蜜を加えたらしく、紅茶から上る香りは仄かに甘かった。

「これで、景色がもつとよけりゃーな」

「何を言ってるんだ、最高じゃないか」

不平を零すイルドに、リクルが満面の笑みで答える。

最高？ 確かに最高かもしれない。墓好きにとっては。

テラスからはドグドの工房の裏手にある墓地が一望できた。

ドグドは注がれた紅茶を一気にその大きな口へと流し込んでいた。せつかくの香りを楽しまないとは無粋極まりない。が、その飲みっぷりはいつそ清々しい。見ていて気持ちよくなる。というか、熱くはないのだろうか？

「げっぶ、おかわり。んで、今日は何の用だ？ 何か欲しいものでもあるのか？ 言え、造れるもんなら作ってやるぞ。造れねえモノは造れねえ。それと、バカに付ける薬もねえ」

「今日はバカを案内しに來ただけだよ」

「バカで話を進めるな」

眉間に皺を寄せるイルドに、リクルが楽しげに微笑む。完全にイルドが嫌がるのを楽しんでいる顔だった。

「自己紹介したろ。俺の名前はイルドだ」

「んなぁことは分かってる。お前はイルドだ。そして紫の変態バカだ」

ドグドの言葉に、お菓子を頬張っていたシェイナが笑いながら咽た。ミストリアに背中をさすってもらうが、なかなか笑いが解けない。笑いながら苦しむシェイナに、イルドがますます渋面を作る。

しかし、イルドは何かを思い出したのか渋面を引っ込めると、真面目な顔をしてドグドに訊いた。

「ドグド、お前は何年もこの町にいらんだよね？」

「いるぞ、いるぞ。もう、この町が出来てちよつとしたくらいに流れてきたから、ざっと800年くらい前になるな。当時はまだまだ

みんなこの村のひよつこばっかだよ。歌もろくに歌えなきゃ、いまほど可愛くもなかったが、拙い姿もまたよくてな。ワシがなんども助けてやったもんだ。357年前の天下の大雨の時はひどかったなあ。あんなときや、村の一部が流されかけた。あの時はでっかい船を作ってやったけかなあ。それと、最近じゃあ七年前の雷の日もひどかった。お前は覚えているか、天が完全に雷雲に支配されて、雨の如く雷が降った日だ。まあ、あの日もワシが作った避雷針のおかげで、村はまったく無事だったが。それと、そうだな、ちよつと昔に戻ると437年前の……」

「いや、そんな昔のことまで聞いてねえって。……じゃあ、この男に見覚えはあるか？」

イルドは双眸を鋭く細めると、内ポケットからイルド自身とひと組の男女が写った一枚の写真を取り出し、男の方を指差して訊ねた。
「ここ7年以内だ」

言葉を強めるイルドに、ドルドは眼を細めて写真を凝視すると、デカイ頭をブンブンと横に振った。

「知らん、なんじゃ人を探してるのか？」

「ああ、俺の双子の兄なんだ」

口元にニヤリと笑みを浮かべるイルドに、リクルが「また嘘言ってる」と零す。もう完全に、リクルにはイルドの嘘をつく時の表情を覚えられたらしい。

「ちつ、やり難いなあ」

舌打ち交じりにイルドが写真を内ポケットに戻すと、なにやら腕を組んで考え事をしていたドグドが「ちよつと、待ってる」と言つて椅子から飛び降り工房の中へと駆けて行つた。

工房の奥から戻ってきたドルドが、手に持ってきた何かを机に叩きつける。ドグドが工房から取ってきたのは虫がごだった。中では、数匹の蜂が羽音を立てている。

「ドグド、この蜂は？」

リクルが覗きこんで訊ねる、ドグドはクッキーをかみ砕きながら

答えた。

「【追跡蜂】、別の名前じゃあ【サーチビー】。ようは、臭いをか
がせりゃ、その臭いのもとを探しやがるアホ賢い蜂だ。しかもこい
つらはワシが調教したからな。この世の果てだろうが、地の底だろ
うが、天の上だろうが探し出さず。こりゃイルド、さっさと探し人
の匂いが付いているものを出しやがれ」

バンバンバンと壊れんばかりに机を叩いてドグドが催促する。

イルドは浮かない顔をして肩を竦めた。

「残念ながら、アイツの匂いが付いたものなんて持ってねえよ」

「何じゃとっ！」

ドグドが声を張り上げる。こめかみには血管が浮かび、今にもは
ち切れそうだ。

ぐぬううう、と低い唸り声を上げ、ドグドが長いひげを掻き
走る。どうやら、この【追跡蜂】とやらがドグドの自慢の一品だつた
らしい。

「ドグド、他に探し人を見つけれられるような道具は無いの？」

「くはっ。そんなもんないわ。ワシの【追跡蜂】たちは優秀だから
のな。39年前なんぞ、風に攫われたワシの大切な髭を全部探して
きてくれたことさえあつたんじゃ。こやつらに探せんものは無い！
ドグドの探しとる男だって、ちよちよいのちよいで見つけれられ
はずなんじゃ。匂いさえあればのお！」

他人のことでここまで真摯になるとは、本当にドワーフらしからぬ
ドワーフだ。

イルドが紅茶を啜りながら奮闘するドグドを眺めていると、横手か
ら不意に声が上がった。

「じゃあさ、新しく作っちゃえばいいんじゃない？」

クッキーを頬張りながら、シエイナはあっけらかんと言いつつ
イルドとリクルがぽかーんと口を開ける。確かにシエイナの言う
とおりだが、そんな簡単な話でもないだろう。

そう思った矢先、ドグドはどこから取り出したハンマーを豪快

に振りだした。

「ガハハハハハハ！ その通りだ、その通りだ。ワシが造ればいいんだ。新しい人探しの道具を。ガハハハハ。なんだ、簡単じゃねえか！ よっしゃ、待ってる。今度は匂いになんか頼らなくてもいいやつを作ってやらあ」

「匂いに頼らないで、どうやって探すんだ？」

「この写真があるじゃねえか！」

ドグドは振り回していたハンマーをピタリと止め、机に置かれた写真を指した。

「この写真をもとに、写っている奴らの居場所を映す投影機にすればいい」

「そんなもん造れるのか？」

「造るっ！」

ドグドはきつぱりと宣言した。造れないつもりは毛頭ないらしい。

「だが、すぐには無理だ。早くても2日はかかる」

「上出来だ」

ドグドの言葉に、イルドは興奮したように身を乗り出した。やっ
とアイツに合える。興奮しないわけがない。

そう、やっ
とアイツに……

恐いほどに笑みを浮かべるイルドの隣で、「写真か、それはいいね」とリクルが手を打った。

「ねえ、イルド。僕たちも写真撮ろうよ」

「なんだよ、藪から棒に」

「だって、僕とシェイナはあと数日で死んじやうからさ。そしてら
イルドは号泣するだろ。慰めように一枚持っておいてもいいんじゃない？」

「そこは素直に『思い出』っていえねえのかよ」

呆れたように溜息を漏らしながらも、イルドは楽しげに笑って頷いた。視界の端では、すでにシェイナが髪形を整え、ミストリアに手伝ってもらって化粧を始めている。

「たいして変わらないだろ」

ぼそつと零したイルドの左目に、またしても化粧の小瓶が激突した。

「んがつ！」

「アンタはその顔で写りなさい！」

吐き捨てるように言いながら、シェイナが化粧を再開する。イルドはすでにドグドに頼んで、写真機の準備を整えていた。

手持無沙汰になったイルドは、忘れてはいけなと、写真を摘み上げてた。そして、遠い眼をしながら写っている自分たちを眺める。あの時は、今のリクルやシェイナのように、俺たちは本当の親友だった。

焼き付けられた親友の顔を睨みながら、イルドは何度も問い返した疑問を再び投げかける。

なんでだ？ ジョイル。

お前は、なんでルマを……

「イルドー、準備できたよー」

シェイナの弾んだ声で、イルドの意識は現実に戻された。

「ああ、今行くよ」

写真ポケットに仕舞い、イルドは席を立つ。

この写真が後に重大な意味を持つなど、このときイルドは知る由もなかった。

第三章『(未定)』(1)

「リクルー。乗り心地はどうだ？」

「思ってたより、ずっと爽快さ」

吹き抜ける逆風を押し退け、リクルの声がヘルメット越しにイルドの耳を叩く。

ドルドの工房を訪れた翌日。イルドはリクルと共に、セケエーダ村の後ろに構える背高い丘をスカイバイクで駆けあがっていた。

「この辺で、お宝がありそうな遺跡はあるか？」

昨日、イルドがドグドに訊ねると、ドグドは少し考えて答えた。

「セケエーダ村の裏手にある丘を越えた所に、今はグレーゲン樹海に飲み込まれちゃった古い都市がある。ただ、お宝があるどうかは知らねえぞ」

ドグドは「行っても無駄だ」と付け加えたが、古い都市があればそれだけでイルドには向う理由になった。

古い都市には思いがけないお宝が眠っていることがある。もちろん、当たりはずれで言えば9割方が外れたが、残り一割で当たるお宝に想像を完全に超える価値を持つものが少なくない。トレジャーハンターならば、宝の真偽は二の次。古い都市と聞けば、向うのが常識だ。

それに、イルドにはもう一つ向う理由があった。イルドの探し人は、そういう古い都市に、遺跡を探している。ならば、出くわす可能性が一番高いのは、町よりもこちらの方だ。出くわさないまでも何らかの痕跡が見つかればめっけもんだ。

「しかし、まさかお前もついてくるとはな」

背中越しに、イルドが素直な疑問をリクルに投げかける。前を向いて喋るイルドの声は後ろには聞こえにくいはずが、リクルはしつ

かりと答えを投げ返した。

「僕だって男だよ。ちよつとした冒険に憧れることもあるさ」

「へー、そー。ふーん」

「なんだい、その納得いつてない返事は？」

リクルの質問に、イルドはやや間を空けて答えた。

「俺は嘘つきだ」

「知ってるよ」

「だから、嘘をつく人間の匂いは分かるんだよ」

背中にリクルの動揺が伝わる。もし、これが正面切って話していたならば、イルドはその変化に気付かなかったかもしれない。でも、今は違う。背中にしつかりとしがみ付いているリクルの動揺を、イルドは見逃さなかった。

「なんかあるんだろ、これから行く遺跡に」

「さあね」

とぼける気かよ。

手応えのない返事に、イルドは大きくハンドルを切った。スカイバイクの車体が斜めになり、外側に大きなGが掛かる。イルドでさえ引き剥がされそうなのだ、後ろに座るリクルは尻がサドルから完全に浮いていた。

イルドは声を上げる暇さえなく全力でイルドの背中にしがみ付いた。車体を大きく傾けながら、スカイバイクが旋回する。景色が右から左へ高スピードで流れ、丘の芝生の緑と空の青が帯状になる。しかも、傾斜になっている丘の上での旋回は、丘に向かっていている時は叩きつけられるように地面が迫ってきた。反対に、丘から離れるときは空中へ名が出されそうになる。少しすると身体だけでなく、脳までもが揺れ出した。風を受ける右半身は引き攣り、逆に左半身がドロドロに溶けていく。その上、イルドは徐々にスカイバイクの速度を上げ、旋回する輪を小さくしていくのだ。堪ったものではない。

堪え切れなくなったイルドは、なんとか動く指先でイルドにタツ

ブした。旋回がゆっくりとなり、バイクの車体が元の垂直に戻る。だが、リクルの身体と頭は未だ回っていた。景色は右から左へと流れ続けるし、気持ちの悪い汗が背中から流れる。

「左回転もいつとくか？」

「もしそんなことしたら、君の紫色の背中が大変なことになるよ」

精いっぱいの強がりを書いてみたがリクルにはそれが限界だった。なんか、ようやく一つ勝てた気がするな」

顔半分振り返るイルドは、リクルが出逢った中で一番良い笑顔を浮かべていた。

気持ちが晴れたイルドは、再び真面目にハンドルを切る。

丘のてっぺんまで駆けあがると、とてつもない断層がイルド達を待ちかまえていた。

空中でバイクをホバリングさせながら、イルドが「ひゅー」っと口笛を吹く。

「これが、ドグドの言ってたのは」

ゴーグルを外し、イルドが肉眼で断層を視認する。断層は丘を二つに割り、その見えない顎を広げている。まるで、来るものの全てを飲み込む奈落の口だ。横幅は丘の彼方へと続いており、対岸までの距離はおよそ50メートルはあるだろう。およそ、陸路からこの断層を超えるのは不可能。

「なるほど、これじゃあセケエーダ村の連中は先に行けないわな」

「うん、……その筈だよ」

「リクル？」

リクルの声の調子が急に変わり、イルドが首を回す。ドグドの即席ヘルメットを付けたリクルは、じっと丘の対岸を凝視していた。

向こう岸にある何かを見つめながら、リクルがゆっくりと口を開く。

「イルド、さつき『遺跡に何かあるのか？』って聞いたよね」

「あ、ああ」

「それを知りたいんだ。僕も」

リクルの言葉に、イルドは怪訝そうな顔をして眉の間に皺を作った。

「どうということだ？」

イルドがすぐに切り返すと、リクルは静かに眼を閉じ、改めて対岸を見つめ直しながら思い出すように語りだした。

「イルド、僕には親友と言える友がいた」

「俺のことか？」

「その思い上がりは嫌いじゃないよ」

につこりとリクルが笑う。どこかぎこちない笑み。

イルドは無言のまま話しの先を促した。

「名はアロエル。そうだな、恋敵、って言えば良かったのかなあ。今思えば」

恋敵という単語に、イルドはすぐさまシェイナを思い浮かべた。なるほど、そう言うことか。

ニヤリと底意地の悪い笑みを浮かべながら、イルドはリクルに問いかけた。

「アロエルってヤツは、今どこにいった？」

「アロエルなら、もう死んだよ」

「あ……」

リクルの言葉に、イルドの笑みが凍りつく。

「わ、わる……」

「うそだよ」

慌てて謝るイルドに、リクルは笑いながら切り返した。

「なっ！」

イルドの顔が怒りで赤くなる。

そんなイルドの憤激を覚めたのは、遠く対岸を見つめたリクルの静かな言葉だった。

「たぶんね」

「たぶん？」

「うん。死んでなければ生きてるよ。まだね」

「わけわかんねえって？」

眉間に皺を寄せるイルドに、リクルは「ごめんごめん」と謝ると、懐かしむように細い眼をさらに細めて話を再開した。

「アロエルは旅に出たんだ。セケエーダ村を出てね」

「なんで、そいつは村を出たんだ」

イルドの親友が村を出る理由が、イルドにはとても分からない。セケエーダ村は、ある意味理想郷だろう。争いは無く、美しいものに囲まれ、伴侶を得て後の子のために死んでゆく。短命ということを考えれば、なおさら村を出るべきではないのか？ 村があるのはグレーゲン樹海という辺境の奥の奥。他の村や国へ辿り着く前に、彼らの寿命は確実に尽きるだろう。

イルドの問いかけに、リクルは「分からない」と首を横に振った。「僕にもわからないんだ。なんでアロエルが村を出たのか？」

「そいつは、前々から村を出た行く言ったのか？」

「いや、アロエルはむしろ誰よりも村を愛していたよ。誰よりも…」

「じゃあ、何で？」

「わからない。ただ、アロエルは村を出る前に、この先にある遺跡に向かったんだ」

なるほど、だから付いてきたのか。

リクルが今回の詮索について行くといった理由が分かり、イルドがリクルに習って対岸へと視線を流す。

そのとき、イルドはある違和感に気が付いた。

「ちよつとまで、リクル。アロエルは、どうやってこの断崖を超えたんだ？」

底の知らない断崖を覗きこみ、イルドはリクルに問いかけた。とてもじゃないが、生身の人間が飛び越えられる距離ではない。イルドのように飛行手段を持っていなければ、到底不可能だ。

しかし、リクルが答える前にイルドはある可能性に気が付いた。

「あ、そうか。ドグドがいたな」

あれだけ様々な道具を生み出すドグドだ、飛行手段の一つでも作れても不思議ではない。

イルドの推測は……外れていた。

「いや、ドグドはそんなもの作ってないって言ってたよ」

「じゃあ、そもそも遺跡に行っていないっていうのはどうだ？ 村を出たのも、もっと別の理由があつたんじゃないか」

「村を出た理由はともかく、遺跡には行ったはずだよ。間違いなくね」

確信を持つて答えるリクルに、イルドは「そうか」と小さく頷く。しばし無言のまま対岸へと視線を向けるイルドとリクル。丘に噴き上がる風が、ふたりの脇を吹き抜ける。

その風に押されるように、リクルは真剣な眼差しで対岸を射ぬきながら、再び口を開いた。

「アロエルが村を出たのは、やっぱりあの遺跡が関係してると思う。僕は、アロエルが何を見たかを知りたいんだ」

「そうかい。じゃあ、いっちょ飛ばすか！」

イルドがアクセルを踏みつける。エンジンが躍動し、それまで空中に漂うだけだったスカイバイクが唸りを上げて断崖絶壁へと飛び出した。

下方の色が芝の緑から、暗黒の暗闇へと変わる。断崖から噴き上がる風は、岩肌に冷まされ奈落の冷氣ごとく冷たかった。

「なんかこう、背中がヒヤリとするね」

「ケツがむずむずしてこないか？」

軽口は吐いた先から風に捕まり背後へと流れて行く。

数秒で断崖絶壁を飛び越すと、対岸の先はなだらかな傾斜になっていた。

断崖を勢いよく飛び越えた推進力をそのままに、イルドは燃料を考慮し、スカイバイクをエンジン飛行から推進飛行に切り替える。エンジンの振動が無くなり、まるで斜面を滑るようにスカイバイクは丘を下ってゆく。

しばらく進むと、丘の切れ目が見えてきた。どうやら、そこから先は崖になっているらしい。

（また、さっきみたいなの奴か？）

崖の一手手前でブレイキをかけたイルドは、その視界に飛び込んだ景色に言葉を失った。

天に聳える、灰色の円筒状の建物。同じく灰色の金属で舗装された道路。見たこともない設計で組まれた分厚い城壁。

そして至る所に蔓延り侵食する、無数の蔦や木々。

丘の向こうには、過去にはとても高度な文明だったことを想像させる、朽ちた街並みが広がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5002z/>

クレイジーパープル～たった七日の恋のうた～

2011年12月16日23時46分発行